507
39

I can't do much as write you a letter except to send
kind questions. We have been since 5th July home

this kind
with a lit
about eig
long by t
sloping dow
bank in f
front of Ben
sloping up
the writing

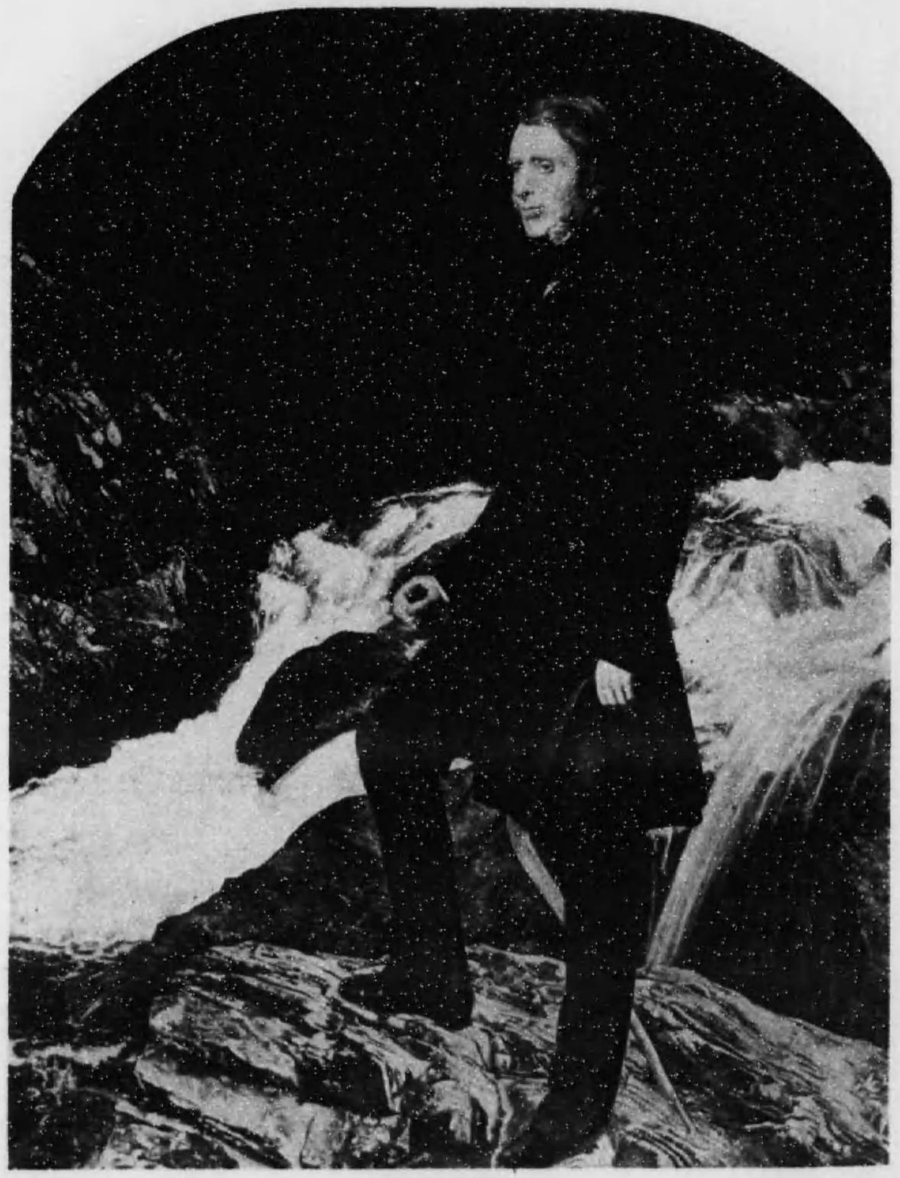
507-39

John Ruskin's

觀術美的濟經

大正
11. 9. 25
內交

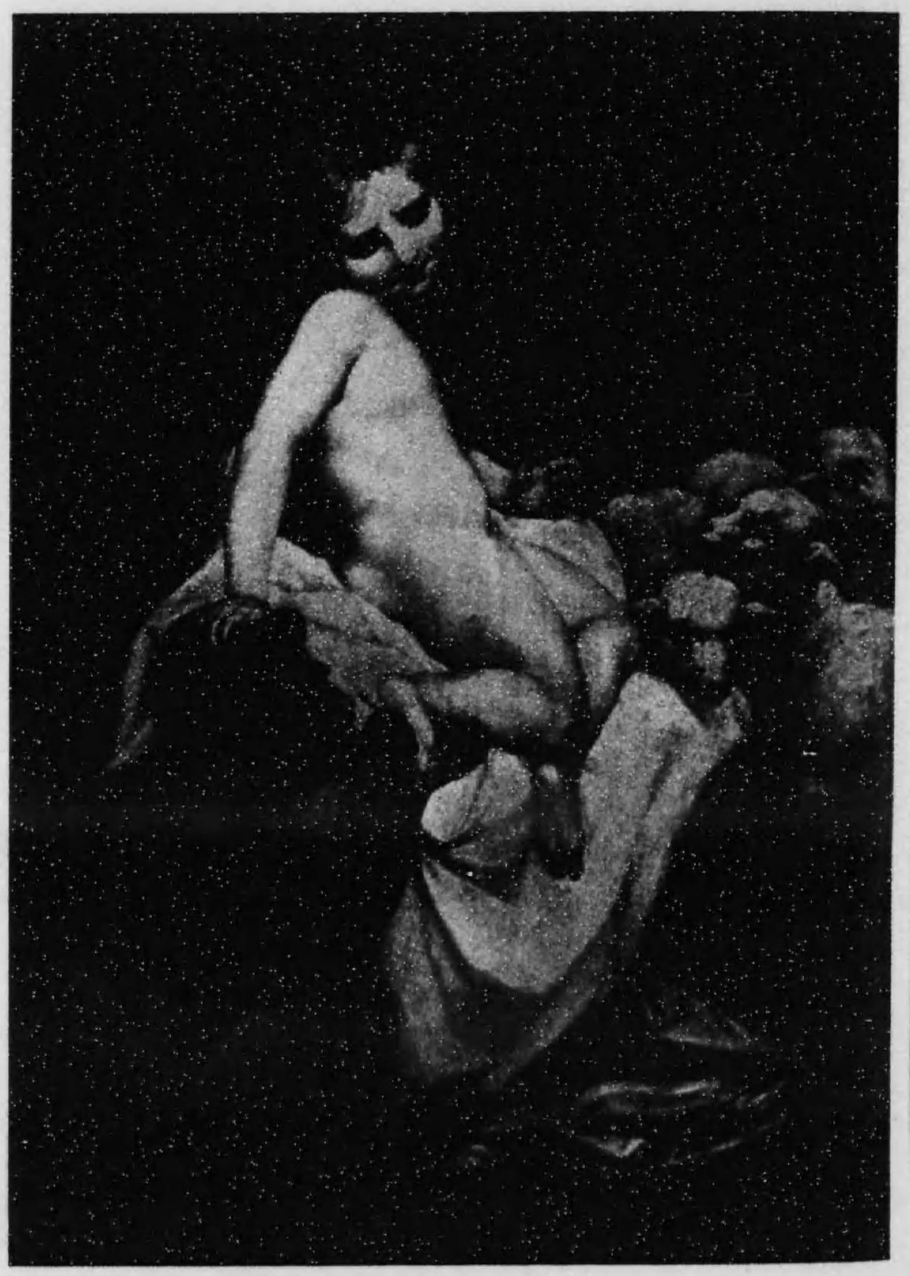
W Ruskin



John Ruskin. 1853.

(From the picture in the possession of Rear Admiral Sir William A Dyke Acland Bart.)

Mrs. Ruskin (after Lady Millais)



Ruskin as a Child

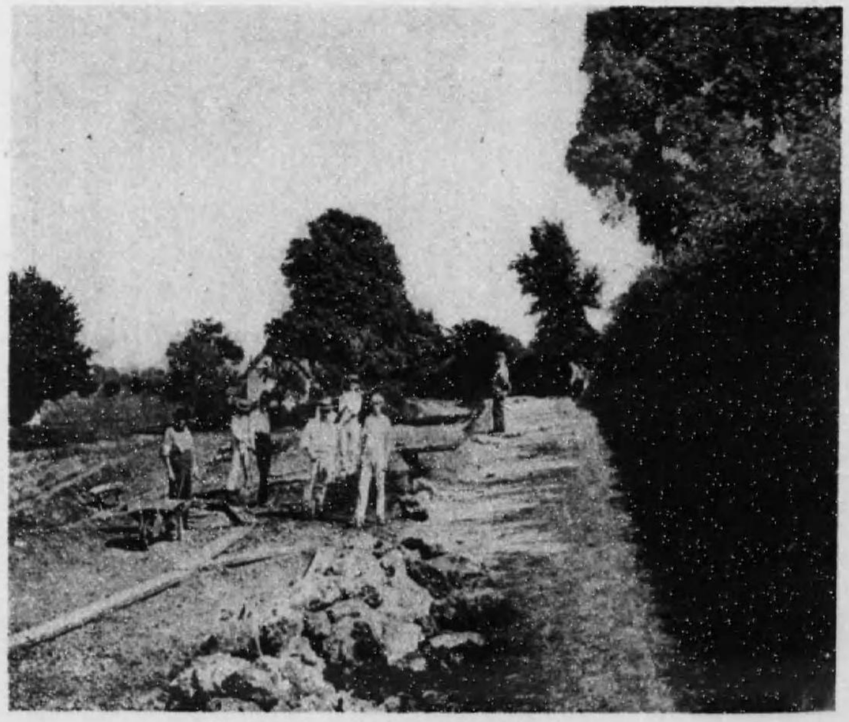
Study for a Classical Subject

John Ruskin and Sir Henry Acland

from a Photograph taken by Miss Acland

at Brantwood August 1st 1893

BRANTWOOD
161



The Ruskin Road at Hinksey

此の著を
一筋に家業に
いそしむ吾れ等の
父に捧ぐ

In loving memory of my wife's help
This book is dedicated to
Our beloved father.
Sept. 1922
R. L. Mikimoto

此小著をするにも足かけ五年以上の歳月をかけました。家業の爲めに倫敦に渡つた時もラスキンの墓へお詣りしたり、古本屋で著書をあさる事丈けは忘れませんでした。

テニスに無中になり過ぎたり、騒々しい家業の爲めに幾度となく筆は止まりました。然し殆んど毎夜と言つてよい位にラスキンの敎へに接したのです。

今日此頃、世の中が痛ましい混亂の狀にある時、惱む者はプロレタリヤばかりでなくアリストクラトやブルジョアの或者も心から惱んでゐます。

私共夫婦も恐らく此の惱みを味つた者であろうと存じます。

輕井澤にて

一九二二、秋　著　者

目次

第一章　自序……一
第二章　ラスキンの生れるまで……二九
第三章　ラスキン抄史……六七
第四章　愛のラスキン（His Love Episode）……一〇一
第五章　經濟的美術觀……一三七
　第一節　ラスキンと奢侈欲望……一三九
　第二節　ラスキンと經濟眼……一五七
　第三節　ラスキンと美術批評……一八五
　第四節　ラスキンと眞理福音……二二六
　　第一項　美術上のラスキンの福音……二二八
　　第二項　政治經濟上のラスキンの福音……二三四
第六章　ラスキンとロゼッチ……二六九

ラスキンの經濟的美術觀

挿畫目次

自畫像（原色版）
一八五三年のラスキン
ラスキン夫人（後のミレイ夫人）
少年時代のラスキン
ヘンリー・アクランドとラスキン
ラスキン館（著者撮影）
ヒンクセーに於ける工事中のラスキン道路（上）
ヒンクセーに於けるラスキン道路の眞景（下）
ラスキンの手紙（表裝凸版）

自序

靜かに思ふと世の中は和いだ樣に平靜である。別に動いても居ない樣だ。然し決して此の頃の世の中は安穩ではない。自分の心が騷がしい樣に世の中も動搖し切つて居る。

やつと滿三年の誕生を祝つた彼には到底理りつこのない筈だが、彼は此の搖らぎの渦中に呱々の聲をあげたのだ。私は自分で不思議と思ふ位、外界の强い刺戟を受けて、丁度眞黑な、土壤の世界から生れ上つた土もぐらの樣に、驚醒したのである。

彼の生れない少し前に、始まつた人間の誤つた爭が、遂に有史以來の世界的大戰爭と云ふ姿で現れたが、此の悲しい事件の爲めに世の中の人が色々と學問をした。私も此の大戰爭の爲めに敎へられ、新らしい生命を握つた一人である。此の大事件によつて營まれた狂亂的暴舉、狂人的謬想、狂熱的智識の運用は、人の貴い生命を極端に勞費して、地球の隅から隅まで全く破滅の恐怖を以つて塡めて仕舞つたの

である。

此の大戰爭の取り進めらるゝ前、安價な人道主義に額づいた非戰論者は、社會主義者と共に、戰ふの愚を休めよと叫んだのである。然し、生長する彼の目から見れば、それは一種の狂言に過ぎなかつた。馬鹿々々しい事だつたのだ。彼が其の頃の歷史の一ページを披らいて見るならば、屹度苦笑するだらう。一九一四年七月二十三日、セルヴィアの一青年が墺太利の皇儲を殺した。毒瓦斯やタンクの爲めに若い青年が死んだり傷いたりした。平和な航海を續けなければならぬ運命の船が美事に擊沈められて、可愛いゝあどけない子女までが海の底に沈んで行つた。平和の工業が休んで鐵成金や船成金が殖え、富が斜になつた盃盤の水のやうに一方に流れた時、罪のない貧乏人が增して行つた。

藝術が荒んで伊多利のダヌンチオまでが飛行機で飛んだ。新聞は愛國心にもゆる伊國詩人と言つてほめたゝへたが、私はたゞへ無用でなくとも方面ちがひのエネルギーを浪費した事を殘念に思つた。

彼が大きくなつたら此の馬鹿々々しい大戰爭を何と見るか。多分學校や書物

で讀む事と思ふが、大戰爭の中頃、ロシヤにも、ドイツにも――否凡ての國家にも、あの Das Kommunistische Manifest (一八四八年)に現れた妖怪がしきりに徘徊した。其頃である。私の心の波が立ち騷いで來たのは。遂々妙な平和が來た。自分はセルビアの一青年が墺國の皇太子を殺した年は其の月日と共に記憶してるけれど、平和の來た年、平和の祭をやつて立ち騷いだ月日などは記憶が出來ない程、不平和の時が來たのである。

今に彼が大きくなつて經濟史眼を開く樣になつたら、私の『妙な平和』の意味も理つて呉れると思ふ。

ロシアの皇室も立消えて、私の好きであつたロシアの國歌、ボーゼ、ツァー、リヤ、ブラーニ、の美しいメロディも唱へられなくなつた。獨逸も同じ事、私共が法律に經濟に化學に凡ての恩惠を受けた國の國體までが更つて仕舞つたのである。

生長した彼には、少くも私には新らしいと思つたロシアとドイツが又古るい姿で現はれるかも知れないが、ともかく私の時代の古るいロシアはドイツと共に死んで行き新らしいものが生れて來たのである。

私の頭も改造された。彼の母の頭も、叔母さん達ちの頭も、祖父の頭すらも改造されて行く。私はつく〴〵大戰爭の悲劇に感謝する。夫は自然の過程であるが今から十五年前の御祖父さんは、或日私の足をビシヤリとなぐつた。私は知らずにロシア皇帝の肖像を踏んだのである。私は心に憤激した。お祖さんはひどいねと思つたのである。此の頃は内のおぢいさんも私をなぐらない丈に進歩したと思ふ。

彼が此の世に生れた頃の兩親の生活狀態はどんなであつたか——私共夫婦は實に幸福な生活であつた。贅澤を言へば限りがない、然し私も彼の母さんも食ふに困らぬ人間であつたから、確かに幸福な動物であつた。貧困を知らぬ人間、欲しいと思ふお金に困らぬ人間は少なくも現在の社會組織から見て非常に感謝すべき境遇にあつたのだ。小さい資本家、五百人の使用人の頭である祖父の孫に生れた彼も物質的には限りなく多幸であつた。

彼は京都の病院の特等室で完全に生まれた幸福者だ。汚たない部屋、貧しい寒い、暑苦しい部屋で產婆の手に引き取られて、生れる澤山の赤子の中に、彼は博士と

若かいキリスト信者の看護婦に守られて此の世に人間となつた一人である。

幸福、幸運、之れ等は比較的のものだけれど彼は貧乏人の子供でなかつたのだ。彼の父である私は誠に淺學の一大學生であつた。大學生時代に妻を貰らひ、子供をもち家庭を作つた。私はなんと言つても Luxus な動物である。

然し考へて見ると私も其頃から所謂もつたいない、過分だと云ふ心持ちが沸いて來た。其の頃眞底から祈る氣分にあつた私は、靜かな朝、教會に跪づいて感謝の祈を捧げたのである。其後まもなくであるが私は急にペシシストニになつた、夫れは言ふまでもなく大戰爭の影響である。

私は自分の改造が此の大事件によつて行はれて行く事に氣がついてうれしく想つた。將に產み又產まんとする新らしい世界歷史的創造力が此の大戰爭に動きつゝ社會的改造が行はるゝの事實は、やがて幸福者(所謂食ふに困らぬ呑氣者)の私達に苦しい、時の經驗を惠んで呉れるのである。此の事件の現出で强者が弱くなつた。弱い者が强くなつた。お前の大きくなる頃はいざ知らず、もう暫らく此の世に强者の英雄は生れまい。否所謂英雄の出現よりも數多い良い人間の集團

が欲しいのだ。アレキサンダー大王もナポレオンもシーザーもちよつと出て來られまい、悲しいけれど愉快だ。此の事件の罪は過去の弱き者への幸福だ。其姿はクリスト(救主)の姿である。

最近の或る一日、私はナポレオンの評傳を、二回に亙つて實行の多い或雜誌で讀んだ。雜多に現はれる短かい小説よりも有難い心持で讀み破つた時、私は近頃にない愉快な感想に耽つた。そして此の姿を考へた。此の頃はタゴールよりもレーニンの世の中だ。ゲーテよりもゴリキイの悅ばれなければならぬ私の心理が、强者の哲學を最も自由に最も天才的に振りまいたナポレオンに、一種の共鳴を覺えたのは自分ながらに皮肉な事だと思ふ。然し私も決して長く愉快を味つたわけでない。目前樣々の現象に紛れて深く想はなかつのだらうが、思を潛めて反省すると、ナポレオンの運命ばかりでなく、私の小さい人生までが悲愁に包まれて仕舞はなければ止まなくなつた。彼も私も實に弱いものである。

人の生は短くて力が無い。個人にも凡ての人にも、無慈悲で暗黑な沒落が、夕闇の樣に靜かに又確實にやつて來る。

大戰爭の力で私の頭へやつて來る。幸福者の俺に早晩沒落が見舞つて來る。

然し私は準備する。私は準備しながらも、色々の障害の爲めに沒落の渦中に自らを投げねばならない不安を直觀する。私は父にも此の直觀を物語つた。然し彼の御祖父さんは笑つた。

『お前は病人だよ、心配するな、世の中はもう一度變るよ。』

私は最愛の父から病人呼ばはりをされた。然し私の心持は決して安心出來なかつた。

自分は病人と呼ばれてもともかく準備をする。私は父をのけて物質的に準備の出來ぬ人間だ。私は長男だけれどまだ法律上からも其の權利を缺いて居る。私は精神的に俺自體を救ふ。ここう決めたのである。

* * * * * * *

狂熱の光を浴びて驚ろきの目を見張つた私は、此のまゝ死んで仕舞ふか、夫れとも神の愛に浴しながら何んとか頭の中に始末を付けて、今暫らく生きのびる方法を考へねばならぬ破目になつた。私の肉の上は無論の事、魂の上にも、もつと生き

て行きたいのだ。彼の生れた頃私も生れ更らなければならなかつた。

私はふと洋行を想ひついた。けれども腰が立たぬ。腰の座る藥が必要だ。私はほと〳〵と困り切つて仕舞つた時に、運命は

『積極的に研めよ。苦るしめ。惱め。求めよ。尋ねよ。然らば汝は與へられん。』

と教へて呉れた。

夫れから幾月となく淋しい時がつゞいた。

或時は詩人の樣に、或時は畫家の樣に、又或時は浮浪人の樣に、自然の展げた神祕の翼に抱かれたり、泣いたり疑つたり信じたり仕て來た。けれどもまだ私はほんとうに救はれない。

私は愛を求めつゝ考へ込んだ。

私は母の慈愛に缺けた人間だ。彼の御祖母さんは私の三つの時死んだ。私は自分の性格が多少ひねくれてやしまいかと思ふ。

私の性格は人生に反抗的な思想を具有して居る。自分から時々一人ぼつちに成り勝ちだ。

ツルゲーネフやトルストイに共鳴した時代もあつたが、此頃はドストエフスキーやゴルキイを讀んで見て一層に面白く感ずるやうになつた。

大戰爭と言ふ大きい姿に影響を被つた私は、自分の人格の一隅に新らしいものを發見し、且つ強いて意識した。

私は時々もつと人間らしく考へて死なねばならぬ、そして折角此の世に生れたならば、せめて墓へ向つての道程中に、もつと思想を深めて行かねばならぬと思つた。

だが金が自由で幸福な私は、樣々の社會的誘惑から脫する事が出來ず、一向に安閑なる道をたどつて行く。

それは誠に惡む可き安價な樂天主義だつた。それは物事に感激して泣く事もあつた、けれどもその涙は誠に安つぽい涙であつた。

幸福者、富者の涙程、僞善的な涙はない。

恒產あれば恒心ありといふが、私は生活に富裕なりし故に、却つて恒產なければ恒心ありと言ひたい位である。

私は生活を熱愛した。けれども其愛し方は足り無かつた、私は考へる、けれども
その考へ方はほんとうに淺薄であつた。談るもはづかしい位、私はリテラリイに
淺薄らな人間であつた。

然し物靜かな秋が京都を訪れた時、第二の姿は私共十名程の學生に對してその
沈痛端正なる言葉で次の樣な言葉を冒頭に、靜かに物語つた。——私共は人間と
して深く考へる事が必要です——私は數名の學生と共に感激した。始めて私の
腰が立ちかけたのは實にその頃であつた。第二の姿から靜かに敎へられた。
スマート敎授の Man who thinks—Nach-Denken 等の數語は未だに私の記憶を去ら
ない。

私は三年前の秋(第二の姿に接してから二年目の秋)京都を去つた。無論私の腰
は立つて來た。

今は銀座の眞中で何時も社會問題たるべき奢侈の生產を憶面もなくやつて居
る。私は雜然たる電車の音、荷車のきしる音の中に、第二の姿から敎へられた事共
を想はざるを得ない。

想出多き京都の生活！私は數多い失敗の中にたつた二つの悅びの過去を靜か
な都に見出す。

私は凄慘な戰爭が取り進めらるゝ頃、悲しい淋しい、然し幸福な結婚をした。私
は自らに謙遜と思ふ結婚をし父の慈愛に樂しい京都大學の幾年を終つたのであ
る。其間にお前も生れた。運命の神によつて與へられた幸福の一つは是れだ。
他は云ふまでもない、第二の姿から敎へられた幸福である。然し私には法學士と
云ふ學位は貰へなかつた。私は學位を捨てゝも平氣であつた位、怠け者でのん氣
者だつたから、私を了解して呉れる人間には私が道ならぬ人間に想へたにちがい
ない。父や妻は泣いた。私は小さい姉の子供からさへも、叔父さんは駄目ねと言
はれた。

私は此の種の批難を當然受けねばならぬ立場であつたし、又自らの良心に愧ぢ
ない確信から、甘んじて夫れを受けて讀書した。然し私は可なり不愉快な思であ
つた。それが私に對する當然の罰だつたらう。然し此の位の不快が伴ふ位の事
は私は始めから知つて居た。然らばなぜ私は人の欲しい學位を欲しなかつたか。

問ふまでもない、私は食ふに困らぬ人間で、家業が待つて居たからだ。自分と云ふ者は夫れ程に幸福で又墮落して居るのかも知れない。

京都に於けるある日の午後、私は丸太町の通りを、古本屋をあさりつゝ寺町まで歩るいた時、一人の乞食に橋の上で出逢つた。その乞食は若い肉の引き緊つた青年であつたが、疲れ切つた生の敗殘者であると云ふ面持ちが、私の感傷的な心をひどく刺戟して、

『俺も此の若者の様に、家も父も戀も何もかも捨てゝ世の中を敗殘者として歩いてやらうか』

と思つた程である。

――私の贅澤な心は、私の心の劇場で芝居を演じたのだ。――斯う書いた私の日記の幾ページを見る時、私はその乞食に同情するよりも、一種の尊敬と憧憬を感じたのである。

赤茶色の帽子を眉深に被つた乞食の眼からは、丁度ロシヤの小説にでも出て來る様な、疲れては居るが男々しい光が、そのブロンドの眼球に輝いて居た如く思はれたに異いない。

其乞食は恐らく自分の貧苦について苦しんで居たらう。けれども餘裕ある私の心には、乞食がその身に覆ひ被つて居る、何かの屈托と苦痛を脱ぎ去つた人間であるかの様に思はれた。

此の乞食は滿足してるのだ。彼は沈痛な悦びを味つてるのだから、心配してやる必要はない――極言すると、私の批評眼は此の邊の冷淡さに止まつて居たのだ。

私は過去の己れを省みて心に愧ぢる。然し私の様な、又私より以上に幸福な者は、斯うした呑氣な考へ方をして、世の中を害しては居まいか？意識的に罪を行ふものも無意識に罪を行ふものも結果では同じだ。

私は第二の姿に接して大きな刺戟を受くるまでの自分を反省して、非常に自らの淺薄な考へを悲しく思ふ。

然し、資本階級や富める人、幸福なる人の經濟眼と貧乏觀は大抵こんなものではあるまいか。――

瀕死のもぐらもちは腰が立つた許りでなく、よろ〳〵〳〵と歩みを續けて行く。

○

嘗てフランス革命前に、饑えたる百姓共がルシャール伯と云ふ領主に、其の地租を輕減せん事を乞ふと、ルシャールは豪然として『百姓は草でも食つてれば可いのだ』と言つた。

巴里に於ける革命の報が傳へられるや、百姓共はルシャール伯邸を破つて、伯を囚へ、庭木に繫りつけ、馬糧の草を喰ませて『草でも食へ』と言つた事がある。

よろ〳〵と立つたもぐらもちも、まさか日本じやそんな事はあるまいと思つて居たが、同じ樣な事實を先年の米騷動で眼の當りに見せつけられ啞然たる事暫時だつた。お前は何も知らない――お前の生れる一月前、三年前の七月頃私の故鄕鳥羽では、某造船所の御蔭で成金町となつて、時ならぬ金が港の隅に迄降つた。其時、町役場での調べに、物價騰貴で眞に困る者は――米代に困るものは僅かに七人だといふことだつた。所が町の金持ちは頻りに來る新聞記事や電報に驚かされて全く意義のない金を出した。彼等は露骨にも氣安めの慈善と救濟をやつた。私は百年前のフランスの一貴族と現在の日本の富者階級に大した等差のあるべ

き筈が無い事を想ひ、恐しく心配になつた。

私は私の家で使つてゐる一職工から

『丸持ちも斯うなつちやずい分あせりますね、あんまり見えすいてゐちやありませんか』

と嘲りの言葉を聞いた時、米騷動を原因とせる凡ての救濟事業乃至慈善事業は、當然の歸結として無效に終るべきを豫感し、たとい一時的の效果あらんも、永遠性なき事を察知して、マルクスの所謂クラッセンカンプ(階級鬪爭)の說を想記した。彼の大きくなる頃には此のクラッセンカンプも無くなるだらうか？階級鬪爭――然し安價なる平和論者や、何者かに捕はれた宗教家や論理學者や政治家は是れを口にしたり文字に表現するのさへも嫌ふのであつた。けれども正直な歷史眼で過去と將來を見るならば此の四個の文字から得る概念は恐ろしく興味ある、又丁度臭いものに蓋する事の出來かぬるものでなければなるまいと思ふ。

生れて始めて經濟眼らしいものを見開らいた私は、先づ河上教授の講義で驚いた。夫れから急に澁六氏のカール・カウツキーの社會主義倫理學と、オランダのゴ

ルテルが勞働者の爲めに書いたと云ふ唯物史觀解說とを讀んで痛快に思つた位、レゾナンツを感じ而も內心自分の境遇を省みて不安を感じたのである。私の三年前の日記の或るページには次の樣な文句が拔いてある。

――階級鬪爭とは何を意味するか單に政治戰及び經濟戰を意味するばかりでなく更らに夫れ以上富力の階級に對する哲學上の思想戰を意味するものである。――

――富力の階級はプロレタリアに次の樣に說伏せんとする。曰く、精神は高く此の社會の物質生活の上に立つ者である。――

近世社會主義者として最も偉大なるマルクスの親友エンゲルスは『宗教は虛言に始まる』と言つて Spirit が社會の物質生活の上に立つ可き者で無い事を高調して行つた。

かのイタリアの社會主義者 Enrico Ferri の Socialism and Modern Science の第六十二ページを觀るならば神の信仰を破壞する事が社會主義運動の重要なる要件である事を發見する。

思ふに近世社會主義の多數が神の實在性を否定するは『神人を造りしにあらで人神を造りしなり。』と云ふ純然たる哲學上の唯物觀に立脚するからではあるまいか。

信者としての私は今急にキリスト教的社會主義者の中に逃れ行かふと思はぬ。又たつた今、日光に浴してやつと立ち上つた自分が、何れに屬するかすらも決定仕得ない人間である事は謙遜の心持ちで云々する許かりではない。

私は最も小さい淺學の學生たる故に當分一定の方針で Nach denken がやつて見たいのだ。だから私の心裡にはナザレのイエスが救生主の姿で現れる事もあれば、マルクスやベーベルも同じ價値の救主である。

だが私にも一つの考へがある。それは社會主義の倫理及宗教が直接に理想的個人を要求仕無いで、理想的社會の實在に由つて理想的個人を作りたいと云ふ考へである。如斯きは至難の事であり同時に理想論たるの非難は免れまい。けれども若しも吾等が現在よりも正純な、より自由な、より調和ある、社會生活を形成し得らるゝなれば、此の中から個人性の理想的要件の目的と完成が發見せらるゝの

ではあるまいか。

書き行くまゝに米騒動の時朝日新聞の鐵筆で河上博士と姉崎博士とが論爭した事を想ひ浮べる。

『資本家制度の下に於いては勞働者の勞働が一個の商品として販賣される』と河上教授が論ぜられたのに對して

『勞働を商品として取扱ふ樣な思想のある間は勞働問題は解決が出來ぬ』と論難せられたるに、河上教授は『勞働を商品として取り扱ふは眼前の事實である夫れを見たるは余の眼の罪でない』

と反論された。私は姉崎博士の善意の精神主義に敬意を表するも、此の精神主義を根本的に打破せんとする偉大な事實觀のある事を見て愉快と不安に驅られた。そして此の不安こそ最も私にとつて貴重なものである。

私は再びゴルテルの言葉を引用して、自分の考への一隅に心よく納めて置きたいと思ふ。

――人間の社會に於いては精神が社會生活を決定するのでなく社會生活が精神

そのものを決定する即ち思想から事實が生ずるのでなくて事實から思想が生ずるのである――

――所謂プロレタリヤが精神的に奴隷となつて居る事は物質上の鬪爭にも非常に妨げとなる――

（以上ゴルテル氏著唯物史觀解說第一章より拔き書）

私はカウツキーやゴルテルを批評するの價値なき者である。然し最近自分の家の小さい工場で可成り組織立つたストライキらしいものが行はれて、溫なしい高等教育を受けた工場長が犧牲になつたのを見れば階級鬪爭なるものが眼前の事實で勞働者不安は無論の事、資本家不安も漸時に增加して居るのが判る。然も夫れは漸時ぢやない隨分急激だ。

再びゴルテルの言葉を借らんに

――勞働者は階級としてソウならざるを得ない。諸君は一層高き賃金、一層幸福なる生活、一層多くの休養を望まざるを得まい

諸君は自ら團結せざるを得まい、諸君は富裕閥と戰はざるを得ない、諸君は

勝利者とならざるを得まい。生産がそれを欲し、生きたる勞働がそれを欲するのである、――

事實は事實だ。何んといつても默つてにらみ殺ろしに出來るものではない。

ある時東京府主催の工場主會があつた。親父の不在を幸に私はそれに出席した。若輩の私は發言したくつても發言が出來ずに默つて歸へつた。私は工場主や資本主が階級闘爭なるものにあまりに冷淡である事を氣付いて恐ろしいと思つた。もしも私の感想が誤りであり、工場主等が眞實にのん氣で無いならば私は心より安心する。けれども夫れは私ばかりでなく同じ會に出席した私の叔父までが同じ不安な心で春の夜を共に歩るいて談つたのである。

工場主の馬鹿息子に生れた私は實際不安を感ずる。私は洗禮すらも受けたキリスト教信者である。私がもしも眞に神の愛を享けて居るならば不安が無い筈だ。けれども自らの信仰淺き爲めか、私は唯祈りにのみ安心が求められなくなつた。何んとか知的解決によつても安心らしいものが欲しくなつた。私は第二の姿によつて Nach Denken をやり同時に先哲偉人の跡を尋ねて精神的に解放して貰

らいたくなつた。私は先づラスキンにすがりつく。

* * * * * *

經濟學の理論に極めて乏しい頭を有する自分がラスキンを批評する事は不可能事である。けれども私はラスキンの人格を通じて經濟學の理論に到達せんとするの努力は小さいながらに可能であらうと思ふ。

私は可能を知つて、敢えて此の學究的態度に自分の良心の滿足を見る。極端なる社會主義論者は私の態度を目して『ラスキンに逃れ行く者』とするだらう、けれども現在の日本の狀態と、私自體の要來からラスキンに一種の救を求むる事は最も適切であり又合理的である事を確信する。

高等學校三年の終り私は Ruskin and his circle と云ふ一書を愛讀して詩人として の彼、藝術批評家としての彼れをおぼろけに知つたのである。其後三年の時の經過を、私は主としてウォーヅウォースとハイネに送つたのであつた、

大正五年の秋、私は京都の第二の姿から始めてラスキンが社會改革家としての第一人者である事を教へられ、ミルの自叙傳に散見するカーライルの態度と共に

私の經濟眼の最も重要なる部分を占めて來た。

一體日本の經濟學者は僕の目から見ると何んとなく冷たく見える、そして人間らしい温味が少くなつて學問にこり固つて居過ぎは仕まいかと常に思つて來た。

科學的、論理的な社會主義を創設したマルクスですら其の反面にはずい分温かい人格の流れが漲つて居た。もしも Sparge のマルクス傳を讀んだ人があるならば、彼の理論に興味をいだくばかりでなく、面白いエピソードを必らず見出したに異いあるまい。又何人でも少しく美の眼で探るならば經濟學者としてのジョン・スチユアート・ミルは、文學者としても著名である事、彼の自叙傳の淋しい悲しい告白に於いても理解される事であらう。

日本の經濟學者を冷たく感ずる私の眼にラスキンが美しい姿で現れて來た時、私は日本人として生れた事を悔ひ、千八百五六十年頃の英國の天地に呱々の聲を上げて見たく思つた程である。

此年はラスキンが生れて丁度百三年目だ。三年前の五月マルクスの百年祭が日本の學者達ちの心の中に營まれた。彼はマルクスが生れて百年目に呱々の聲

をあげ、ラスキンが生れて百年目に始めての誕生日を祝つた。

* * * * * * *

靜かに思ふと自分達の前途が心配である。私は彼の父として責任がある如く、私は何となく恐ろしい將來の變化を豫期せねばならぬ。滿二十五歳の父が彼を此の世に產み出した事は如何にも罪の樣に思ふ。私は父からゆづり受ける私有財產でお前を養つて行くのでは何となく自らの良心に濟まぬ樣に思ふ。如何なる種類の勞働かは知らないが、ともかく私は自分でかせいだ勞力の報酬によつてお前の生長を希望するの權利を持つものである。

私は此の頃自分の肉體の健康に限りなく感謝する。働らく事によつて凡てのよろこびを感ぜねばならぬ人間は、父として、夫として限りなき感謝に溢るゝものである。

ラスキンの研究は私に何を致へたか？之れから私の論ずる問題は凡て彼から學んだ全部である。自然の美の貴い事、人間の美の貴い事、勞働の貴い事、勤勉の貴い事、謙遜の貴い事、人間の愛、自然の愛の貴い事等私は殆んど數へ盡すことの出來

ない教を賜つたのである。

自分の書き行く事の拙ない所は彼の最も興味深かき點である。もしも私の努働に何等かの缺陷を發見するなれば、夫れはお前が自分よりも勝りて、人間として の正しい道を歩める事となる。

私は今彼の祖父に出來る丈け柔順に仕へて居るつもりである。奢侈の害を知つた自分が、奢侈生産をやつて行く事は屹度、生長した彼からは冷笑さるゝ事と思ふ。又ラスキンを論ずるものが此の社會問題でやかましい世の中に平氣で奢侈生産をやつて行くのは矛盾の甚だしいものである。たとひ、夫れは矛盾でなくとも、自分の良心の光は、何となく暗いベールを懸けられた樣な感じがする。彼は其の父が勇氣に乏しい人間だと笑つて呉れる時が來る。私はむしろ其の時を待つて居る。然し私がどんな心持ちで家業を繼いで行くかは次第に彼に理解して貰らふ事が出來ると思ふ。私は彼が、無邪氣に、國家の爲め、日本の爲め、家の爲め、社會の爲めと想ひながら生命を投じて働いて行く個人主義經濟學の一住民たる祖父を尊敬して愛することを心より希望するものである。けれども、私の如く、社會主

義經濟學時代の一住民として生れながら、却つて平氣で奢侈の生産を出來る限り一所懸命にやつて行くお前の父を惡んで貰ひたいのである。

* * * * * * *

世界的に動きに動く人心はどこへ落ちつくのか、自分も其の落ちつけない心を持つた一人である。自分の勉强、自分の書いて行くのは唯々おちつきたい爲めである。

今、日本の社會に、マルクス派の經濟學が偉大な力を持つて民衆を教化しつゝあるの時、ラスキンを選んだのも、自分がひたすらに落ちつきたい爲めである。人間は民衆と共に動いて行く準備が必要だ。夫れは決して俗事でない。人間は民衆を見降して貴ぶる時一番下劣である。然し私のラスキンを選んだのは決して貴ぶるつもりでない。民衆と共に立派に動めいて行きたい爲めに、ラスキンの休處に、暫時の息を入れた理である。

私がラスキンの經濟學者として偉大である事を知つたのは、大正六年四月經濟論叢に發表された河上肇博士の『Unto this last を讀む』と云ふ論文を讀んでからで

ある。夫れは今から五年前の事である。

何時死ぬか分らない人間と云ふ動物に生れた彼の父が、若かいにもかゝはらず偉そうに記るして行くのは、彼の父はどんな人間であつたかと彼が先きゞで考へる場合、此の小さい思索の跡が何かの役立になると思ふからだ。

一九二二、六、五、

「此の小序を長男美隆に贈る、序中彼とは長男の事である」

ラスキンの生れるまで

ラスキンの生れるまで

ラスキンは如何なる經濟的思潮の時代に生れたか――彼を產んだ英國の經濟的史潮

ナポレオンを產んだ者は、其の當時のフランスの現實なる狀態と、ヨーロッパの緊急なる現象とであつた。或學者は夫れを思想界に求め或る學者は逆に物質界に求める。英雄が時代を作るか、時代が英雄を作るか、私は其の何れにも首肯し得るが、今經濟學の一學生としてラスキンを論ずるに當つては、後者の說を把らんとするものである。誠や、ラスキンは靜的英雄である。彼は樣々の意味に於いて其の時代に卓越した個人であつた。けれども彼を產んだ時代を等閑視して直ちにラスキンを論ずるは早計である。私は高等學校時代に學んだ英國史を背景に、淺學ながら、簡略に彼を產んだ第十九世紀の英國の經濟的史觀を試みるであろう。

註、此の小論は私が京都大學に於いて河上教授の經濟學史の講義を筆記せる者

Ruskin's Life Purpose as Stated by Himself.

—o—

"All my work is to help those who have eyes and see not."

"I had no thought but of learning more, and teaching what truth I knew—for the student's sake, not my own fame's."

"My pnrpose is to insist on the necessity as well as the dignity of on earnest, faithtul, loving study of nature as she is."

"The end of my hole professorship" (at Oxford) "would be accomplished,—if only the English nation could be made to understand that the beauty which is to be a joy forever, must be a joy for all."

Arnold Toynbee 氏の遺稿たる英國産業革新論を參考とした。何故自分は河上教授とアーノルド、トインビー氏等を選らんだか――未だ日本の思想界に肉の上にも生き活躍せらるゝ河上教授を論ぜざるも、トインビー氏の所論中に次の如き論說あり、此の論が歷史を重んぜんとする自分に取つて最も有難く感じたからである。トインビー氏は英國産業革新論第一章緒論中に曰はく

『經濟學の一たび英國に起りてより其の講究に從事せる學者尠きにあらずと雖も、其の唱導する經濟學は餘りに抽象的に陷り、歷史を度外視するの弊を免れず。換言すれば國家社會の事實を度外視するの弊を免れず……勿論アダムスミス及びマルサス氏の如きは、歷史的思想を有せざりしにはあらずと雖も近代經濟學教科書の模範を供し、斯學に大勢力を振ひしリカード氏に至りては全々歷史的思想を缺けり……余を以つてこれを見るならば、經濟學の研究は抽象的方法と歷史的方法とを併用して始めて完全なるべし』と。

トインビーは僅か三十歲で一八八三年(マルクスの死んだ年)死んだ青年經濟

學者であつた。彼はラスキンの在世中に死んだ。彼はSocialistにあらず、Democratにあらず、彼は一個の歷史家にして又勞働者の强烈なる同情者であつた。彼は英國の北部地方にノートを持たず、閑雅優美にして貴族的の風彩ありしも、多數の職工に講演を試みて每ねに熱心なる歡迎を受けた。彼は不思議にもラスキンに似た所があつた。

哲學と音樂は何と言つても獨逸である。ベンサムやミルを產んだ英國も偉らいが。カントやショペンハウエルを產んだ獨逸は更らに偉らい。

英國には一のベートヱンもワグネルも生れなかつた。けれども經濟學に於いては、今後はいざ知らず、獨逸は英國に劣つて居た。

マルクスが祖國獨逸を逐はれ、フランスを追はれて、救はれたのは英京デーン街の一居室(フラット)であつた。彼が近世社會主義經濟學の鼻祖たるに至つたのは英國の天地が如何に Generous に彼を容れたかを證明する。社會主義經濟學は獨逸に最も發達した感があるが、其の Heimat は矢張り英國であつた。

一八四五年、マルクスがロンドンに亡命の客となつた頃の英國は、其の產業發達

の歴史に於いて最も代表的のものであつた。若しもマルクスがその餘生を英國に送る事が出來なかつたならば、恐らく彼の資本論は生れなかつたであろう。經濟學は英國の學問にして英國は經濟學の祖國なる事は何人も否むべからざる事實なる事を先づ第一に頭に置く必要がある。

經濟學の祖國は英國であるが、經濟學者の祖はアダム、スミスである。デカルトやスピノザを以つて開けたる近世哲學の野は、カントが出るに及んで認識論の花が咲きその基調が調つた樣である。けれども人心は浮動して修まらない。此時に當つて表はれたのがルソーであつた。彼は直截簡明に『自然に歸れ』と叫んだがその絶叫の偉大なる反響はフランス大革命と云ふ大悲劇を演じた。リベラリズムは歐洲の思想界を風靡し、同時に個人の自我的覺醒が一層明白になつた。十八世紀の後半重商主義の反動として重農主義の勢力增大し、終いに自由放任の時代を迎へてアダム、スミスの學說が獨り天下に横行するに至つた。自然主義自由主義は當時に於ける思想界一般の傾向であつて、政治上には自由平等主義として表はれ經濟上には自由競爭、自由貿易論と爲つたのである。アダムスミスは經濟學

上の資本主義精神の發達に効果があつたものである。

一七七六年にアダムスミスの Wealth of Nations (或る人は是れを富國論と譯してゐるが國富論の方が正當である)が出版せられた。此の時代の英國の產業界とラスキンの時代(一八六二年六月 Unto this last を公にせし頃を指す)の產業界とは其の外部に於ける狀態を著るしく異にして居た。即ち一七六〇年以後凡そ百年の間に於いて、農商工業の組織及び生產方法に外部的一大革命が行はれたと共に經濟學上の革命も行はれて居たのである。その當時英國には人民の產業を制限する煩瑣な中古的制度が流行して居た。勿論此の制度は當時に於いても漸時衰退の形式にあつた事は過去十年前我國の現狀の樣であつたが未だ近代の產業自由の主義に壓倒せらるゝには至らなかつた。

此の種の國家論乃至中古的干涉政略は國富論其他の著述をなして意見を發表した時に於いても尙當時の產業界に多大の影響を與へて居たものである。今日に於いてこそアダムスミスが創めた、利己心是認の個人主義的經濟學は、過去の遺物の如き觀があるが、尙その當時に於いては、一歩時代を超越した學說であつた。

註、トインビー氏の産業革新論第四章第五章第六章を讀む時アダムスミス時代の此の種の消息が詳しく手に取る如く論ぜられてある。彼は英國鄕土の衰亡、其の政治上の無能無策、産業革命の鄕土に及ぼせる影響を論じて、經濟學研究の歴史的方法は必ずしも保守的ならず、世間普通に所謂自然法則に源づくと云ふ社會の變動は、人爲の不正に因る事多く、鄕土の衰亡は正にその好適例也と痛論して居る。我日本の資本家に取つて正に一服の好清凉劑である。

國富論は個人主義經濟學の寶典たるべき事、マルクスの資本論が社會主義經濟學の聖書と言はるゝに似たれば、愚生は此處にトインビーと河上教授の批評を掲けて學ばんとするものである。

(一)國富論は論理錯雜、乾燥無味の一時的事實を顧列する事により晦澁不明なれども此の缺點こそ本書の價値の大を示すもの也。

(二)國富論は叙事の精致と科學的論法を缺けども、經濟學をして取引所及び市場よりして進んで哲學者の書齋に入らせしもの也。

(三)國富論に於いては從來の學者に見るを得ざる世界的思想を發見せり。(凡そ

一國の貿易は一國の商賣貿易にあらずして萬國共通の商易也、故に世界萬國は共通の一大社會也と)。

(四)世界主義の主張と共に個人主義利己主義を認めて自由放任主義 (Laisser faire) の基礎を創めたり。

以上はトインビー氏所論の大體を愚生が括りたるものである。便宜上更らに河上教授の批評を掲けてアダムスミスの誤謬否な個人主義經濟學(英國正統經濟學派の特徴と見做すべき色彩)の缺陷を指示し、ラスキンを産みし第十九世紀に入るべき前提とするものである。

(一)アダムスミス誤謬の第一は、富の增加を計る事のみを以つて即ち經濟の使命なりとなせし點である。(貧乏物語、一八五頁)

(二)第二の誤謬は貨幣にて秤量したる富の價値をば直ちに人生上の價値の標準とした事である。(貧乏物語、一八七頁)

註、以上二個の誤謬を指摘せんとする學說は人道主義經濟學並びに社會主義經濟學の兩者である。吾人は第一の誤謬に於いて痛切に感ずる事は、分配の問

題である。即ち富の生産が必要なると同時に分配が當を得なければならないと云ふ事である。即ち健全なる經濟狀態とは分配を重んぜねばならぬと言ふ事である。正統學派にあつて、稍社會主義的傾向のあるベンザムの言葉を記るさんに The more nearly the actual proportion approaches to equality, the greater will be the total mass of happiness とある。

即ち富の分配は平等に近ければ近き程全體の幸福即一國、社會の幸福の分量が益々大となるのである。スミスの所說はあまりに個人主義的であつた。

次に第二の誤謬からは極端な放任主義と自由競爭が生れた。そして生產者は唯單に多量の生產をして値段の高く賣れるものを造ればいゝ、それが直接社會の繁榮となるのであるからと思つた。此の誤謬はラスキンの There is no wealth but life と云ふ金言を度外視した。アダムスミスは人間の道德的向上に貢獻する所のものゝ中に富がある事を忘れて居る。

今此處に私の拙ない經濟史眼がアダム・スミスに到達し終つた以上、英國に於ける此の自由競爭から生まれた競爭の利弊、產業革命の象徵、急激なる人口の增加、農

業工業上の革命、地代物價の騰貴等と各種階級間の關係の變動等につきても詳しく論じなくてはならない。夫れは歷史的事實なるが故に、至難の事ではないが、愚生の目的がラスキンの抄傳を著述するまでの一階段なる故に、省略して、少しく脫線し乍ら、當時の思想界を眺めつゝマルサスの人口論に足を踏み入れたくと思ふ。

マルサスは一七六六年に生れて居るからアダムスミスが國富論を書いてから正に十年目である。そして彼が死んだのは、一八三四年だからラスキンが生れて十五年目である。彼は十八九世紀の交間に生死した。

十八世紀から十九世紀に入らんとする頃の思想界は凡でに述べた如く混亂の秋であつた。全歐の天地に溢れて居た、ルネサンスの潮流は、中世の終を告げて、若き近世なるものが長夜の眠から醒めた樣に、現實に生れて來た。是れこそ實に個人を解放するの一路であつたのである。此の新らしく生れた近世の子は總ての方面に理知の燈を揚げて、一切の事象にぶつかつたのである。かくルネサンスの齎らした近世の spirit は文學哲學の方面に於いては十七世紀終りの所謂啓蒙時代に至つて爛熟し、更らに十八世紀の終り十九世紀初頭の獨逸理想派哲學によりて

其高調に達した。理知を重んずるの主義は更らに他の一面に於いて自然界の開拓に向ひ、中世が敎へたる一切の超自然(ユーパーナツーラル)超人間(ユーパーノシュ)を排して、凡ゆる神秘奇怪を照破し、茲に勝利の成果は近世自然科學であつた。愚生が前述の近世經濟學の樹立とは最も密接の關係がなければならぬ。此の自然科學的、唯物論的、客觀的の思潮は大陸ばかりでなく英國にも侵入した。愚生はかつてジョンスチュアードミルの自叙傳を讀み當時の經驗論的思潮の代表者コムトがベーコン、ロック、ヒュームと共に英國の思潮界に活躍し、更らにベンザム、ジエームス・ミル等の代表者を出せし事を想ひ感慨無量である。

斯くの如き思潮の横流する英國の思想界にマルサスの人口論が出現したのは當然の理であつて別に不思議はない。然し其の當時にあつては尙ほ今日の日本の如く、人口の增加が必然的の如く貧民を增加して社會の狀態が甚だ憂ふべきものとなつて來た。此際であつた、彼のルソーの說を信じたるゴドウインが『政治的道義の研究』と題する一書を著し『凡そ人間の疾苦は政府及び制度の非に本づくものなり』と論じた。然るにマルサスは是れに反對した。

註、The Inquiry concerning political Justice, and its Influence on general Virtue and Happiness は一七九三年に出版したもので Of population, an answer to Marthus は一八二〇年に書かれたものである。次に記るすものは大學にて河上敎授より敎へられたものゝ大要である。

彼は人口論第一版に於いて大體次の如く論ずるのである。

『如何なる制度のもとに於いても斯かる幸福は享有する事が出來ない。人類の不幸は人爲の不正若くは惡制度の結果にあらず。人力を以つて如何ともする事の出來兼ぬる自然の法則の結果也然らば自然の法則とは何ぞや曰く人口の增加は生活の必要なる物資の增加に超過す。故に人智を盡くして最良の制度を創設するも又自然法の爲めに其の効果は數代にして沒却せらるべし』

以上の如くマルサスはゴドウインの說を駁して、人口增加を制限するものはMisery and vice との實際的制限あるに過ぎずと決定的に論斷した。

註、京都帝國大學法學會發行經濟論叢第一卷第二號河上敎授マルサス人口論初版以下各版の差異參照、

然るに彼は第二版に於いて、婚姻を自制する事を以つてMoral restraining（道德上の制限）なるものを加へて來た。彼は初版に於いて、客觀的、純然たる唯物論に根據を置いて居たが、第二版から正しく主觀的、唯心的に立場を取つて論じて來た。痛快にもゴドウィンは前註に示せる如く、一八二〇年にマルサスに辨駁を加へた。其の要に曰く『既に道德上の制限を承認するは即ち社會の進歩をして完全に赴くを承認したるに外ならず。是れ正に改良せられたる社會の實現を承認するものにあらずや』と。

ゴドウィンは社會主義者であつた。殊に彼れの共產主義的主張は尙ほ當時の資本階級から危險視さるゝ事、今日の日本以上であつたろうが、ともかく貧乏人はなまけるから依然貧乏人なんだ。彼等自らの招いた事であると言つて冷淡に放任して置いた日本のある人士が、社會主義とか勞働問題にびつくりして、急に騷いで來た近事を想ふと今から百年前のゴドヴィンとマルサスの論爭が一層興味ある問題で、愚生の自序に述べた河上博士と姉崎博士の論爭と共に、近頃おろそかに出來ない事柄である。

註、マルサスはゴドウィンの共產主義に答へて曰く、若し私有財產を廢止せば道德上の制限を生ずべき總ての誘因は滅失すべし、人々自ら其の欲を制して將來の計をなすは私有財產あるが爲めなり。と言つた。然るに丁度其の頃米國に於ける共產主義實行の社會がなせる經驗に由つて、マルサスの說の當らざるを證明した。即ち私有財產なきも人々自ら道德上の制欲を行ふ故に私有財產と道德上の制限とは必ずしも兩立せざるにあらざる事を示したのである。

マルサスとゴドウィンとの人口論に關する愚生の知識の大要は右述で盡きて仕舞つた。要するにマルサスの所說は個人主義經濟學を主張する者に至便の議論であつた。又彼は今日の傾向より見れば不思議な位、彼は貧民救助法を（The poor Law）すら廢せんと主張したのである。

（私はラスキンに急そぎたい。けれどもマルサスの人口論を記述して彼の賃金基金論を度外視するはあまりに急そぎ過ぎる云ふものである。）ともかくた此のThe wagefund theory は一八七〇年頃英國の經濟界に遵奉せられる一種の賃銀論で

あるから、個人主義經濟學から分離する事の出來ないものである。今是れを簡略に說明して其の推論より生ずる所の觀念が『如何に此の說が資本家保護に便なるか』を示すであろふ。

一八六九年ミルはフォートナイトリイ・レビュー誌上に一篇の論文を揭げてソーントン氏の勞力論に批評を試みた事がある。その中に次の如く此の賃銀基金論を說明して居る。

『玆に先づ專ら勞働者の賃銀に充當せられ、他の費途には決して支出せられざる一定の金額ありと假定す。此の金額は時に增減あるべし、何となれば貯蓄の爲め、若くは一般富の增加の爲め、自然增加する事もあるべけれども也。然れども或一定の時期に於いては、其の金額は豫定せられ居るものにして、妄りに之を增減するを得ず。而して勞働社會即ち賃銀を受くる社會は此の豫定金額以上の金額は當時の經濟界より之を受取るを得ざるものとす。從つて此の豫定金額以下の金額を受け取る事もなき也。斯くの如く分配せらるべき金額は一定し居るを以つて勞働社會各人の受け取るべき金額の多少は全く勞働者の多少如何

によつて定まるものとす。即ち分配に與かるもの少なければ、各自の所得は多かるべし』。

何と言ふ、資本家、企業家に取つては、虫の良い賃銀基金論ではないか。個人主義的經濟學の學生から脫れて漸く社會主義的經濟學の學生たらんとしつゝあるものには、マルサスの所論が惡くらしい程だ。

第一に、若も斯の如き賃銀基金論から推考するならば、各種職工が賃銀の騰貴を目的として職工組合を組織するも、或る一定の時期に於いて各種職工に適する一般賃銀の騰貴を實現する事が出來なくなる。

第二に、縱令職工が聯合して組合を組織するも之が賃銀を支出すべき賃銀基金を增加せしむる事が出來なくなる。貯蓄の爲めに資本の增加する事はある。此貯蓄力の增加が勞働者の增加よりも速かなれば其の賃銀は騰貴すべきである。然し職工組合は此の貯蓄力を增加するに於いて何等の効力があるものでない。故に賃銀の下落を防ぐ唯一の方法は勞働者の數を制限する事である。

思ふに此の二個の推論は、人口の制限即ち勞働者の員數を減少するにあらずん

ば彼等の幸福を增進する事が出來ないと論斷するものである。實に酷なる學說ではないか。勞働者の醒めざる限り、此の支配を受けたらんも、事實上此の學說の殘忍冷酷なる誤謬は、賃銀基金論をして彼等に惡意を抱かしめたのである。否な勞働者をして經濟學そのものすら一時的にも不快を與へしめたものであつた。

勞働者が賃銀基金論に惡意を持ち、從來の經濟學に不快を抱くが如き狀態は、正に英國經濟界の不安を談るものである。英國の商工業は一大飛躍を試みて居つた。けれども自然は容捨なく舊組織を破壞しながら、社會主義と平民主義の鋒鋩は漸やく、社會の表面に顯はれて、クラッセンカンプの萠芽は英國の天地至る所兆してあつたのである。愚生は今日の日本の現實を觀て、少なくも一世紀近く日本は英國に劣ると感ずる。

書き行くまゝに私の心理にはカーライルが行きつもどりつする。ラスキンが立派な姿で現れて來る。私は急いで分配論、地代論を祖述したリカルドー並びに功利主義の哲學と經濟學との融合を計つたベンザムを通過して、早く個人主義經濟學から脫したいものである。私の目にはもう個人主義經濟學が名古屋城や大

坂城の天主閣の樣に思へる。死物ではないにしても又無用の物でもなかろうが大いして重要の用を果たす理けのものでもない。まあ過去の遺物だ。然しだと思へば、ラスキンを論ずるにその父と母とを究むる如く、私は敬崇なる心持を以つてリカルドとベンザムに數言を費して見たいのである。

個人主義經濟學は其の內容の上に大分變化が來た。丁度マルクスによつて祖述せられた科學的社會主義が近時、樣々の形式と內容とを、變化し來たつた如く、アダムスミスによつて樹立せられた經濟學は矢張り形式と多少の內容を變形したのである。けれども、此處に注意すべきは、利己是認の根本思想は、縱令リカルドーやベンザムに至るとも決して失はれは仕無かつた事である。愚生の考へではジョンスチユアート・ミルの晩年までは明らかに、此の根本思想の連續があつたと見てよかろうと思ふ。

河上博士の論文『生產政策か分配政策か』(經濟論叢第六卷第五號)は最も簡明に又强く、此の問題につきて論及せるものである。私は大學の時に讀んだ。書きゆ

くまゝにふと思ひついたから左に同博士の所論を掲げて私の淺學の罪を謝し、この拙なき論文を補足したいのである。

『顧ふに、生產問題を主として分配問題を從となし……少くとも分配の公平を實現する爲めに生產の增加を犧牲とすべからずと爲すの思想は、英國正統學派の完成したる個人主義經濟學の根本主張である。……

アダムスミスの開拓したるは生產問題に係り、分配問題は元と彼が獨立の研究題目として特に意識したる所にあらず。正統學派の學者中分配問題を主たる題目とせし者はマルサス及びリカルドーの二人であつた。マルサスの人口論は……專ら分配問題を考究する爲めに著されたる者である。又リカルドーの經濟學論も彼自らの序文に明言せる如く分配問題の研究を以つて主たる題目となすものであつた。彼の地代、勞賃、利潤の研究の主眼は此の點に存在したのである……然し彼等は何れも富の分配の不平等なる狀態を以つて寧ろ希望すべきものなりとして之れを辯護するに急なりしが爲め生產の增加と分配の公平とが相衝突する時、之れを如何に解決すべきかの問題は本來彼等が正面の題目としたるに非

らず……(博士は更にベンザムとミルとを詳述せられて、兩者共に分配政策を捨つる事あるも生產政策を犧牲にすべからざる事を主張すと說明せり。然して最後に同博士の結論として、分配の匡正を圖る爲めに、幾分生產增加を犧牲とする事の必要にして、分配政策が主として生產政策が從たる事を主張せらる。』

David Ricardo は一七七二年ロンドンに生れた。人種の優劣を定むるに最も傑出せる代表的人物を以てするならば、猶太人は實に驚嘆すべき人種である。神の子キリスト、ロスチヤイルド、ビーコンスフイールド、スピノザ、ニヤンダー、マルクス、ラツサール等は皆猶太人であつた。彼の父も矢張りオランダの猶太人である。

リカルドーはマルサスの如き歷史的眼光を缺いて居た。其の學說は實際社會の事實を等閑にして專ら演繹法によりて經濟上の事象を斷定せんと仕たから、種々の誤謬に陷つたけれども、社會問題の學理上の研究に甚大の影響を與へた事はアダムスミス以上であつたと云ふも溢美の言でない。彼の著述は中等社會の一大擁護者であつたが、同時に一大脅嚇者となつたものである。即ちカールマルクスの資本論(ダス・カピタル)、ヘンリー・ジョージの進步(プログレス)及び貧窮(ポバティ)論は實に、リカルドーの導火線によ

つて爆發したものであつた。ミルの自叙傳によればリカルドーの演繹法を利用するに至つたのはミルの父の助力によるものであつた。一八一七年まで、凡そ三〇年間はリカルドーが英國經濟學界の主權者たりし觀がある。

トインビー氏曰く、

『彼が論ぜし地代、勞賃、利潤の論說は人生中最も興味あり亦活氣ある實際問題たるに、何故に同情と觀察と想像とを缺いたのであろうか。其の所說の前提に於いて甚だ疑ふべきもの多かりしが、論決が何等の誤謬なく論理に人を魅するの力多かりし故に彼の經濟學が翕然と名聲を博したのであつた。』と。

ミルの自叙傳によるとリカルドーは極めて謙讓の人であつた。功名心に乏しく遠慮勝ちであつた。故に彼の有名なる論說を起草せしめたのも全くミルの父の勸誘によつたものである。ベンザムは嘗つて三人の友情に就いて談つた。曰く『私はゼームス・ミルの精神的父だ。ゼームス・ミルはリカードの精神的父である。故に私はリカードの精神的祖父だ』と。

思ふにリカルドーの學說が當時大なる反響を贏ち得たるは、ベンザム學派の政

治思想に與へたる影響大なりしものがあつた爲めである。私は今ベンサムの學說を直ちに論ぜず過渡期の經濟學者哲學者として有名なるジョンスチュアート・ミルを稍や詳論して、ラスキンを論ずるの準備となし、從つてベンダムにも論及したいのである。

自分はミルの自叙傳につきては、ずい分詳しいつもりである。近か頃讀んだラスキンの praeterita と共に、自分に取つては、ルソーのコンフェション以上に、興味があつた。大學の時經濟學史の論文を書いたが、私の選らんだものはミルの自叙傳についてであつた。今此處にくゞ〳〵しく書くを欲しないけれど、其の文から授かつた異常の教養と、ティラー夫人との美しい友情とは最も感銘したところのものである。もしも經濟學の智識を相當に有し、英文の小說を讀み得るものあらば私は其の學生の爲めにミルの自叙傳を奬めたい。私の小さい書齋にはベートヱンとラスキンとミルとティラー夫人の四人の肖像が掲げてある。今簡單なるミルの評傳を書きつゝ、是れ等先哲の遺影を望み、十九世紀當初の英國の天地と思想界を想ふのである。

カーライルとコムトは、彼の自叙傳に現れて來るが、ミルの思想には此の二者の流れが調和して居るのである。凡でに、ベーコン、ロック、ヒューム以來經驗論的思想を存した英國に、コムトの positivism が歡迎せられたのは當然である。ベンタム、父ミルは其の代表であつた。然しながら當時の英國は全然、自然科學的唯物論的客觀的の論ばかりに支配せられたのでは無かつた。カーライルは、獨逸に生れた唯心論を信奉して少なからざる勢力を振つた。故に疑もなく、ミルの思潮は、二個のカレントの調和でなければならぬ。私は自叙傳より彼の記載を拔書きして此の言の誤りでないことを證明する。

I gained much from Comte, with which to enrich my chapters in the subsequent rewriting; and his book wos of essential service to me in some of the parts which still remained to be thought out. (自叙傳第六章)

When Satar Resartus came out about 2 years afterwards in Fraser's Magazine I read it with enthusiastio admiration and the keenest delight. (自叙傳第五章)

私は先きに便宜上からベンタムに就いては後に論ずると言つた。今此處に必

要を感じたから、ベンタムの學說が如何にミルに影響したかを見る。即ち自叙傳第三章の抄譯を試みてミルの自己修養期を論ずるのである。

一八二一年、ミルは佛國から歸へつた。そして彼の self Education が始まるのであるが、無論間接に、樣々と父の敎へを受くるのであつた。彼の父は特に、ベンタムを讀めと奬めた。彼はベンタムの著デュモントの Traite de Legislation に非常に感動した。そして次の如く感想を述べて居る。

The reading of this book was an epoch-making in my life; one of the turning points in my mental history.

ベンタムの影響はミルの生涯に一時期を劃したのである。彼の生涯に一轉化を與へたのである。彼は民法刑法論を讀んで全く人を異にせるの感があつた。ベンタムの功利なる原理は、彼の從來の斷片的信仰、錯雜せる智識を、統一するの基石となつたのである。今や彼は定見哲學、否一種の宗敎を有すると言つていゝ位だ。ミルは一八〇六年五月二十日生れだからまだ十六歲の少年である。然かも見よ此時までに、彼は、最大多數の最大幸福なる原理の上に立脚して、社會の改善に

努力するこそ唯一の天職なれと自信せし程であつた。唯ベンタムは此の原理を主として法理上、政治上に主として取扱つたが、十六歳のミルに廣く精神的道德的の領域にまで及ぼして居るのである。

It gave unity to my conception of things. I now had opinions ; a creed, a doctorine, a philosophy ; in one among the best senseses of the word, a Religion ……(自叙傳第三章)

ミルはベンタムの宗教論にも共鳴した。彼はベンタムのすべてから偉大の教訓を受けたのである。彼は遂は首唱者となつて、當時の學者、有爲の青年を集めて Utilitarian Society を組織した。

後年樣々の改良事業が此の會員等の手で行はれた、そしてその根本精神とする所のものは矢張ベンザムの學說であつた。唯彼等は動もすると急激で、其主張は一種の過激分子を含んで居たから、此の Society の主張を呼ぶに Radicalism と呼んだ。

功利主義協會の解散したのは一八二六年である。その前年彼は Debating Society と名づくる討論會を組織した。此の協會の論題は主として十八世紀に對する十九世紀の反動と云ふべきものであつたが、此の思想は、ミル自體の二十歳乃至三十

歳の中心問題であつた。一八二九年此の協會も遂に解散したが、此協會の影響は實に甚大なもので、當時の英國一般の大勢を靡然して功利主義の運動に向はしめ、そのオルガンとして Westminster Review が刊行せられたのである。然しかゝる急進的事業及び文學的方面に活躍せるは彼の生活の全部では無かつた。自叙傳に告白する如く彼の主業務たる印度會社々員の餘暇であつた。

以上述ぶる如くミルはベムタムの誠に忠實なる信仰者であつた、否心醉者であつた。愚生は思ふ。もしも彼の若かき生涯が此のまゝた終つたならば、ミルの生涯は左程價値なきものであつたらう。けれども、ミルの思想が過渡期の哲人として價値あるのは、全く彼がベンタムを脫し、父を逃れて新らしい世界に踏み入つたからである。自叙傳第五章は

A crisis in My Mental History One stage onward として其の消息を具さに物語るものである。

註、ミルの自叙傳は經濟學者の必らず讀む可き書であるとK教授からきいた。

學生時代經濟演習と云ふ教課目があつた。私の選んた題目は『ミルの自叙傳

を讀む』と云ふのである。ラスキンのプレーテリタと共に私の最も愛讀した難解の書である。ミルの自叙傳は譯して見たいと再讀した事もある、然し最近今泉浦治郎石田憲次兩氏によつて完譯された。今に何人かの手によつてラスキンの自叙傳も譯さるゝ時が來るだらうと思ふ。

ジョンスチユアート・ミルに就いて書きたい事は澤山にある。殊にミル夫人の其の思索上の影響は特筆すべきものがある。然し今は是れを捨てゝたゞ彼が過渡期の哲人にして經濟學者なる事を短言するのみ。

『顧ふに自利心の自由なる活動を是認する事を以て其の根本思想と爲せし個人主義の經濟學は第十九世紀の半ば英國に於て全盛の極頂に達し、爾來次第に信用を失墜して今日に迫んで居るが、今此の個人主義經濟學の信用披破に就いて最も力ありし英國の思想家は、ミル、カアライル、ラスキンの三人である』

以上は經濟論叢第四卷第四號に河上教授の說く『アンツージスラストを讀む』と言ふ論文の最初の數行を借用したものである。美に醉へる溫かい心の自然の友であつたラスキンを論ずる前には社會批評家としてのカアライルに就いても數

言なければならない。

カアライルの社會的事業は、特に歷史的批評家たりしよりも社會的批評家としての立場に光があつた。彼を非難する者は却つて此の點にあるが――恰もラスキンが美術批評家としてよりも社會批評家として却つて色彩に富んだ如く――然も彼が眞の價値は社會評論家として享樂主義を攻擊せる點にあつた。

一八一八年(ラスキンの生まるゝ前年)ナポレオン戰爭後歐洲の經濟界は非常の不況で英國の都市には經濟的異動が起つた。二十四歲のカーライルは始めて勞働問題に留意し社會改良の必要を感じたのである。

註、カーライルに關する社會批評家としての參考書としては第一に Froude, Thomas carlyle を上げねばならぬ。The social philosophy of Carlyle and Ruskin by F. W. Roe は最近私の手許にとゞいた良書である、自分はカーライルの著書中唯英雄崇拜論のみ讀んだ事がある。『過去と現在』もサートル、レザルタスも有名な『佛國革命史』も『Chartism』も未だに手を附けた事すらない。石田憲次氏の『社會批評家としてのカーライル』(經濟論叢第五卷第五號以下三册に亘る良論

文はありがたい心持ちで讀んだ事がある。

彼は獨逸文學の熱心な研究者であつた、英文學に移入した獨文學の良影響は全くカーライルの功績である。彼は純文藝に生きんと欲し、靜かな靈の生活とシンプルにして高尚なる思索の生活を欲したのであるが、其反面には英國の暗黑なる社會狀態を改良せんと欲する熱烈なる現實的希望があつた。若い彼の心眼には whig も Tory も社會の弊を認めざる享樂主義者の團まりであつた。一八三〇年には七月革命があつた。彼は其の日記に歐洲は『騷擾否革命の時期にある、此の時代は人が髭をそつたり仕事を傍觀したり、手袋をはめたまゝ仕事を續ける時ではない』と言つて居る。

私は今、おぼろげながら經濟史眼をひらいて其の頃の英國の天地を想つて見たい。十九世紀前半英國の經濟的危期は、其の産業革命の直接原因たる諸機械の發明に源を發する。一八一五乃至一八四五年の三十年間は産業組織の變革と奈翁の經濟的壓迫とを最も强く感じた過渡時代であつた。華やかなビクトリアン時代も經濟的史眼をまざ〳〵と見開く時其處には限りなき汚點が見出さる。大工

業の勃興に因りて急に發達した新開の都會には住宅が不足して勞働者は地下室までも住居として用ひねばならなかつた。裏店には上水も下水もなく、塵芥の處分法すら出來て居らなかつたから臭氣と濕氣が充ちて居た。教化の場所も娛樂の機關も不足して居たから勞働者は飲酒と賭博に其休日を過し、心あるものも教會には行かずしてオーウェン派の演說やチャーティストの會合に行つたのである。工場では婦人及び子供を多く使用して安い品物を作つたから、舊來の職人の賃銀が下落して生計難を甚だしくせしめた。尙其上に愛蘭土から多くの不熟練者が移住して來て勞働市場に競爭することゝなつた。特に景氣の循環といふ現象が初めて現はれて、好景氣の時に幾分生計を高めたものは不景氣の時に一層の苦痛を嘗めねばならなかつた。失業問題といふ近世の大問題は此時初めて大々的に起つて來た。それに東洋のコレラが輸入されて英國全土を席捲したのも此頃のことであつた。總て此等の現象に對して當時の勞働者は生活の苦惱を味ふのであつた。かゝる時代にラスキンは生れ、かゝる苦惱の時にカーライルは其の青年期を送つた。舊經濟學派の學徒は尙ほ利己心是認の主張をゆるめない、彼のミル

でさへも尙ほ其の當時はこの流れに漂つて居た。トインビーの言を借るまでもなく英國の救貧法は過度の慈善となり、あの out-door relief は却つて貧民長屋の持主に家賃の保證を與へ、又勞働者の雇主をして賃銀引下げを可能ならしめる樣な弊害を生じて居つた。加ふるに產業革命の過渡時代にあつては貧乏なる勞働階級を發生せしめたから、其等のものは不景氣になれば必らず救貧院の世話になるといふ甚だ不健全な狀態に陷り、救貧費も亦年々多くなつて行つた。そこで救貧法改正は天下の大問題となつて、結局その新法を以つて解決されたのであるが、さて其新法なるものが貧民の側から見ると極めて殘酷な制度と感じられることになつた。此新法はマルサスの人口論に影響されたもので、畢竟救貧といふことは賃銀を最低生活費以下に壓しつけて、賃銀と救濟金とを併せて、僅かに勞働者の露命を繋ぐに足らしむるだけの効果しかないものだ。その頃の勞働者の頭、殊にロンドン附近の政治的にめざめた勞働者の群の心には恐ろしい改造が來た、元來今の議院法が出來た時實業家企業家資本家等は其の昔勞働者の後援を得たものである、一度び彼等が參政權を握ると最早より以上の擴張を欲しなかつた。漸く悟、

つたのは彼等である。

『勞働者は勞働者自らの力を以つて先づ議會の多數を制せねばならぬ、選擧權問題はつまり我等のパンの問題だ』

とは當時英國の階級的に醒めて來た勞働者の心眼であつた。カーライルも此の事實を認めた一人である。石田憲次氏の述ぶる如く彼は一八三一年二月七日の日記に英國改良の問題を討論する議會を冷笑して議員等の自己主義と快樂主義を呪つて居る。

カーライルがミルと相識つたのは一八三一年その著稿サアタ、レザルタスを懷にして倫敦に來た時である。

『私の知つてる人の中でミルは一等理けの解かつた人だ。……彼は誠實で正直な長所を持つて居る……が併し猶ほ多くの重要なる點に於いて孤獨である事と覺悟せねばならぬ』

是れはカアライルが故鄕の母に送つた手紙の拙抄であるが、ミルと彼との間には尙ほ思想上の canal があつたのである。又ミルも彼自身カーライルと性格上

に相異ある事を言つて居る。

"I did not deem myself a competent judge of Carlyle. I felt that he was a poet, and that I was not.....; that he was a man of intuition, which I was not."

カーライルの著"Chartism"の出版せられたは一八四〇年でチャアチストムーブメントの盛んな時であつた。私は是について全く無知である。唯彼の傳記家Richard Garmettの著作中の數行を譯して淺學にかへん。

『ミルとの交渉が不調に終つた。ミルは全く此のチャーチストムーブメントについては彼と別の見解をもつて居たのだ。夫れでカーライルはロッカルトと相談した。同氏はクォータリイレビウの主筆で彼に其の"chartsm"を出版せよと推奬した者である。……P.97

其後エマーソンはカーライルにその著を評して言つた、"chartism is but a breaking of new ground. It stands as a kreliminary word, and yon will one day, when the falt ls riper, read the Second Lesson." ..... P.108.』

カーライルにとりチャーティストの運動は、たとひ夫れが暴動的であつても是

れを暴力に訴へて壓迫せんとする政府の策は決して正當ではない、之れ等の一揆は英國社會の不安の表現で其の根源を治療せねばならぬと說いた。思ふに一八三九年の頃、カーライルが活動の新なる局面は開かれた。彼は當時流行の社會改良に關する機械的施設を信ぜず、之を嫌忌し、其知れる所謂慈善家なる者の、盡く實際ならず賢明ならざるを見て、斷然として起つた。バーミンガムや其他の部分にはチャーチストの運動アイルランドでは、人口增加の結果食物の缺亡、至るところ不平の聲頻に起つたが、之に對する眞の社會的醫師のないは彼の最も痛慨する所彼は所謂慈善家の行爲が寸効なく、否却つて不利なるものだとて、一八三九年より一八五〇年に至る間に色々の著作を出して、一世を警醒した。「チャーチズム」(Chartism)過去及現在(Past and Present)及び「末年の小册子」(Latter-day Pamphlets)の如きは實に此際の產物で、彼は直言忌まず、當時の似而非教師及び其盲目なる指導を罵倒した。彼の社會哲學の中心とする所は『立法改革又は法案など凡て社會改良に關する法的手段は、何の益なきもの、寧ろ惡に次ぐ位のものである。改良事業をして効果あらしめんとせば、英國々會の行動上に深入りせねばならぬ。吾人は國會

の智慧なる者に就て大なる疑惑を有するものだ』と。彼は斯くて耶蘇教の慈善を冷嘲し、ベンザムが最大多數の最大多福論を駁破し、經濟學者の需要供給論を破りマルサス人口論を罵りて筆鋒の向ふ所、之を粉碎せずんば止まざるの慨があつた。或評者は曰ふ、『彼が一氣に口に任せて罵り笑ひ怒るの所、正に一代の奇觀でその言ふ所には矛盾もあつた。彼は己れの嫌忌せし制度を破り、其賤むべきを知らしむるを喜びて、之に代はるべきものを暗示するを忘れた』と。かつてデ・クィン・シーはカーライルに向つて『足下は社會の錫器に穴隙の存するを示したが如何して之を塡塞せんとするか』と云ひし時、カーライルは之に答へなかつたのである。强硬で殆ど酷に渉る言は彼の書の隨所に散見せられた。其教の多くは之を理解し得るも、却つて實行し得べからざるものがあつた。然し彼の言の奥底に潛める多くの思想は、漸時に多くの教育ある人々の皆信奉認容する所となつた。

カーライルの著述の全部が眞理でない事は無論である。定義を下したりロジックを正確にやるのは無論彼の得意とするところで無かつた。彼はずい分熱情的だ。だから常軌を脱した事も少くない。其の社會說、政治說は、概して不可能の

理想の主張であると云へる。男らしけれども、行ふべからざる空想を求め、過去を撤回し、而も進歩の結果を保持せんとするものだと。近世文學に對しては彼は善惡共に大なる影響を及ぼしたが、其弊は善に比しては眞に言ふに足らないものだ。ギングスレーもフロード(Froude)も、ラスキンも、彼に師事した其他無數の文人は彼の勢力の下に伏したのである。青年に活氣を與へ、希望を皷吹したのも亦カーライルの如きはない。彼等は長じてカーライルが思想の領域より逸することを得んか、彼の魔力の外に脱却するを得べきでなかつた。彼は實に多くの人のマスターである。

私の拙ない筆が動ごいたまゝに、もうラスキンは生れて居る。其の頃綠の山野に黑い煙が立ち登つて鐵と炭の爲めに、容赦なく自然は破壞せられて行つた。

ラスキンの抄史

ラスキンの抄史

ラスキンの傳記を知らんと欲せば先第一に彼自身の著 Praeterita を讀む可きである。其參考書として最名聲あるものは The Life of Ruskin by E. T. cook で次にフレデリック、パリソンやコリングウッドの傳記であろう。クックの評傳は先年ロンドンで買ふ積で市中を探廻つたが却々に目つからずやつとオックスフォードの一古本屋で手に入れる事が出來た。ミルの自叙傳はラスキンのプレーテリタと共に最興味あるものだが前者が比較的秩序的に記るされてるに反して後者は A desultory Autobiography with personal anecdotes and reminiscences (by E. T. cook.) である。

ラスキンの先祖はプレーテリタによるとガロウウエーのアデール家及びアグニュース家の出門であつた、そしてその一族中には軍事や文藝上に名を高めた人が少なくなかつた。加奈太のケベックで將軍ウォルフの戰死した時之れを擁援したドクトル・ジョン・アデールの如きは其の一人である。

Ruskin の名の起こりについてはクックの傳記中にも記るされてあるが、今此處には述べないで置く。ジョン・ラスキンの祖父ジョンラスキンは、一七八一年その二十歳の頃に牧師の女カザリン・トウェデールなる一少女と駈落ちしてエディンバラに赴き、其地にて酒商人になり、土地の上流社會と交りて何不足なく暮せしが、晩年虚弱の爲め、事業も失敗し、終に債を負うて死んだ。其子ジョン・ジェームス・ラスキン(一七八五年――一八六四年)は即ち彼ラスキンの父であるが、幼にしてエディンバラなる高等學校に入りてドクトル・アダムの教授を受け、此所で充分に古典を學習した。有名なる哲學者ドクトル・トーマス・ブラウンは又彼の教父であつた。ジョン・ジェームスの成年に達するや、彼は父の命によりて葡萄酒業の見習の爲めに倫敦に赴き、一八〇九年、彼は此地に於て初めてラスキン、テルフォード及びドメク三名合資のシェリー酒業を始めた。三名中のドメク(Domecque)は西班牙に於ける有名なる葡萄畑の持主でテルフォードは資本を支出し、ラスキンは事業の管理をする事となつた。ラスキンの父は模範的蘇格蘭人で精力と先見があり、且つ誠實の人であつたから其事業の管理は宜しきを得て、日に增し繁昌し、彼は之によりて父の債を

償却し得たのみでなく、尙倫敦附近に一の立派なる邸宅を構へ、文學美術を愛翫して、樂しき一生を送つた。彼の子は父の碑に鐫んで「全く正直なる商人」と云つたが、實にジョン・ジェームスは紳士的生活を以て其一生涯を貫き、其人となり寛仁にして偉大の能力を有し、高き好尙を有したのである。彼は斯くして適當の收入を得るに至つて其從姉マーガレット・コックスを娶つた、二人の結婚せるは一八一八年なるが、當時新郎の年三十三にして新婦は三十七歳であつたから、共に若夫婦では無かつた。結婚の翌年一八一九年二月八日二人が唯一の子寶なるジョン・ラスキンは倫敦なるハンター街にて生れた。是ぞ近代に於ける最大の文藝批評家社會改良家であつた。

ラスキンの實母なるマーガレット・ラスキンは美人で剛邁果敢の舊清淨教信者であつた。彼女は自身に對しても峻嚴他に對しても仲々假借する所がなく、義務の念を奉持することも堅實で、自尊にして保守的の人であつた。

ラスキンはその小さい頃の母親の態度を評して次の如く言つて居る、彼の母の嚴肅な態度、まけず魂の勝氣さが微かに現はれて居る。

"I have seen my mother travel from sunrise to sunset on a summer's day without once leaning lack in the carriage" Fors clavigera, Letter 33.

彼の父の感化は溫かさにあつた、そして其の母の感化は善意の嚴格さにあつたのだ。ミルの自叙傳には其の母の記錄が無い、そしてジェームス、ミルの事が多かつた。ラスキンのプレーテリタにはその母の事も可なりに記るされてある。

ラスキンの家庭は或意味の狹隘なる躾を以て名がある。何事も几帳面で融通ごと云ふことがなかつた。彼は往々打擲せられた。美しい玩具も一切彼に授けらるゝことなく、彼れの周邊は凡て彼の禁物とせらるゝ所のもののみであつた。彼は又毎日聲高く聖書を朗讀させられて、嬰兒よりして成人に至るまで彼は彼の嚴母の面前で聖書の二章若くは三章を諳誦させられたものだ。その上記憶の不便な人名や、年代の如きも一切省却を許されなかつた。されど、此聖書の毎日朗讀は確に彼をして苦に耐ふるの習性を養成せしめ、其文學上の趣味性の最良の部分を涵養せしむるに至つた。

ホメロスとウォールター・スコットとは彼の愛讀した詩人で、彼が纔に書を讀むこと

を得るに至るや、直ちに之を繙き、日曜日には彼はロビンソー・クルーソーや「巡禮紀行」を讀んだ。之より稍々長ずるに從ひて、彼の父はシェークスピーアやバイロンや、ドン・キホーテや、ポープなどを聲高く讀み聞かせた。だからラスキンは已に四五歲で文字のひろひ讀みでなく、全文章を讀むことの力を得た。

彼が四歲の時であつた、一家は倫敦の效外ハーンヒルに移轉した。私は一昨年の秋其處へ行つて見た。ロンドンの秋は割合に早く訪れて丁度其時はもう淋しい心地のする一日で、黃ばんだ木の葉が赤みがかゝつて美しい芝生の上に落ちて來た。ノルウッドの丘、ハーローやウィンゾルの遠望は五六歲のラスキンにとりカンバーランドや蘇格蘭の遊歷と共に良い自然教育の資料となつたものである。

ラスキンが始めて手紙を書いたのは一八二三年でその四歲の時だ。彼の初めて詩を作りしは七歲の折で、これはオクスフォードを去るまでの間行はれたる所である。九歲の時、「宇宙の詩エードシア」をものし、爾來彼が二十歲にしてニューディケート賞典を得るまで無數の詩を作り、又傍ら戲曲や小說を始め、バイロン、ポープ、スコット、及びシェレーを摸した。彼は是等の作によりて其美しい感情、語句の精

練等を示したが、眞の詩として見るに足るべきは實に一行もなかつた。彼は幼い時から平和、服從、及び信仰の三稟性を有つて然かも之れに加ふるに、家庭の躾の嚴峻である爲めに自然に同一物に全心身を傾注するの習慣と知覺の極端なる鋭敏とを有した。是等の善性には又甚しい不良の資質も伴つた。第一にラスキンは何等其愛する所のものを有つてなかつた。彼の兩親に對する、之を愛するといふことでなく、唯日月に對するが如くに之を仰ぐのみであつた。彼等は彼に向つてはたゞ自然の有形の力たるのみであつた。彼は又神をも愛することを知らず、又己れを助くるの朋友もなかつた。第二に彼は耐ふると云ふことを知らない。されば彼の力、彼の勘忍は嘗つて危險や苦痛に應じて試みらるゝといふことなく、從つてその勇氣は練らるゝの機會がなかつた。

第三に彼は Social intercourse については何ものも學ぶ事がなかつた。彼は內氣で臆病で其の行動に快活と云ふものが殆んど缺乏されて居た。最後に彼の缺點中の大なるものは彼の判斷力の展びゆくを奪ひ去つた事である、樣々の羈絆が常に彼を縛つて自由を與へなかつたからだ。

十一歳の時羅典や希臘語、圖畫や油繪を學び始めた。其の外彼は割合に不規則な教育を受けた。彼は小兒の好んでするといふ學問も遊戯も知らなかつた。

彼の詩作は其の分量に於いても又その價値に於いても散文以上のものであつた。然し決して彼が詩として傑出して居たのではない、彼自身も其の消息はよく知つて居た。一八四六年五月二十五日にベニスから書いたラスキンの友の W. H. Harrison へ宛てゝの手紙にも次の如く記るされてある。

"My son has not written a line of poetry .....He only regrets over having written any. He thinks all his own poetry very worthless, and conciders it unfortunate....."

ラスキンの初戀の物語りは其の十七歳の時に始まつて居る。是れについて詳しく私は『愛のラスキン』で述べて置いた。

彼のオックスフォード大學生活は一八三七年に始まり一八三九年に一時終つて居る。一八四〇年病氣の爲めに止むなくコースを中絶した。そして一八四二年に卒業したのであつた。

彼の父は其子の爲めに如何なる巨費も吝まなかつた。父の希望は最良學校に

入れて立派なる僧正にするつもりであつた。彼の入學したのはクリストチャーチであつた。彼はスポーツマンでは無かつた。最初彼は多くの學生と交際をせなかつた。ラスキンと同窓生であつた者の述懷談に曰く、(一八四〇年)「ラスキンはオクスフォードにて是まで吾人の見し人間中の最も温順なる者で彼は男子たるよりも寧ろ女子に見ゆ。後彼が天才を認め彼が善性を知りしまでは、彼は人々の笑ひ者であつた。彼の美質、其頓才、其圖畫の巧なる、將棊の熟練なる、其人を遇するの愛相よきは、終に友輩をして彼亦決して凡才にあらざるを知るに至らしめた。」

彼はオクスフォードで後のサー・ヘンリ・アクランドや、後の學長リッデルや、後のサー・チャールス・ニュートンや、ドクトル・バクランド等と刎頸の交を結んだ。彼のカレジの教師はブラウン及びオスボルン・ゴルドンで、彼は又ドクトル・バクランドの宅でドクトル・ドーブニー及びチャールス・ダーウィンと邂逅した。ラスキンがオクスフォード生活の間は彼の母は、我子の世話をなさんとて態々オクスフォードに來住し、ジョンをして毎夕、來りて彼女と共に喫茶せしめた。されば、ラスキンの父も毎日曜日オクスフォードまで來訪したものである。ラスキンの學生生活特に一八三七年から

一八四〇年に至る間の消息はクック氏の評傳第三節 "oxford" に約三十ページに亘つて興味深かく書かれてある。

ラスキンの繪畫に關する經驗はずい分小さい頃からだつた。十歳の時クルイクシャンクの繪本を寫生し、十三歳の時ダルウィッチの橋を寫生した。ターナーの價値を味つたのも其の頃である。

彼の父も母も旅行好きであつて、ラスキンは小さい頃から度びたび連れられ、大陸に遊んだり英國の諸地方を旅した。彼が自然を愛し、自然を說き讃美するに至つたのも、全く兩親殊に父の感化があつたのである。

一八三三年彼は始めてアルプやイタリイに遊んだ。一八四〇年アデールの戀を失つた彼は兩親の心盡くしでフランスの海岸を廻つて來た。

彼の生涯の第一歩にして又最も有名なる著作、The Modern Painters は、かゝる準備の後始めて著手せられたものであつた。

第五回のアルプ旅行から歸へると、バーン・ヒルの家に閉ぢ籠つて一八四二年の秋と冬とを「近世畫家」の著述に費した。そして彼は其著の一部分を終る毎に、之

を父母及び從妹メリーに高く讀み聞かせ、兩親をして我子の天才に嬉し涙を催さしめた程である。彼の第一の考は、古い獨斷說をば審査して其誤れるを訂し、眞の獨斷說を說き明かすにあつた。彼は之が爲めには忌憚なく從來の定說や俗論を排して美術の眞原理を闡明せんとした。彼の當代の畫家に對する警鐘は、學究の傳說を排して濫に何事をも斥けず、又選定せず、自ら卑うして自然に赴かしめんことにあつた。Poussin も將た Claude も不幸にして決して此所に至らなかつた。彼等は自然の眞に入ること深からず、單に其內視する所を描けるのみであつた。Prout や、Fielding や、Harding は、稍或る種類の事相には入つた樣だが、未だ淺薄たるを免れぬ。然るに獨りターナーに至つてば、樹木も、河流も、海も、雲も、山も、色彩も、印象も凡ての事相を描けるに止まらず、尙も進んで之を詩化したのである。

ラスキンの當時の美術界に於ける、吾人をして宛然、往古の哲學を追懷せしむるのである。ベーコンのスコラ學派を攻擊した樣に、ロックの傳說の根柢に反抗した如き又、ルーソーの自然に歸れと叫んだ如く、何れも其時弊を打破して新しき眞理の道を開拓せんとするの點に於て、ラスキンと其行程を一にせざるはない。ラス

キンは今や絕大の抱負を以て其著書の初卷を終り一八四三年五月を以て之を世に問ふた。彼は初め其題名を「ターナー及び舊畫派」と命ぜんと思つたが、書肆の勸告もあつたので、之を下の如くに改めた。曰く「近世畫家殊にターナー氏の作物により、眞美善の實例もて風景畫の點に於ては、古人却つて今人に及ばざる所以を論ず」と。父の見込でラスキンは故と己れの名を署せずに單に「オクスフォード一卒業生著」と誌した。

ラスキンは此書に於て論じて云ふ、「美の觀念は人間の心に現るゝ最も高尙な觀念の一に屬し、常に必ず其度に準じて人心を高め、且つ之を純潔にする、而して吾人人間の絕えず其感化を受くるは、思ふに天意即ち神意によるのだ。見よ、天地間一物として美の觀念を傳へないものはない、又正當な知覺を有する心より之を觀ば、一物として美の部分の方、醜の部分の數よりも、指數すべからざるほど、遙に多きを有せざるはない。自然には醜と云ふものがない。唯美に多少の度が存するのみである。或は又其反對に、四邊の萬物をして一層其價値を增さしめ、宇宙の色彩を鮮ならしめんが爲めに、醜點の少し許り存せし事のみだ」と。ラスキンは又之を

以て英國の青年畫家に訴へて居る『純一の心情を以て自然に往け。如何にせば最もよく自然の眞義を描破し得べきかを考へよ。此外には何ものをも考ふることなくして忠實に且つ勤勉に自然と其歩調を合せよ。何物をも排斥せず、何物をも等閑にせず、又何物をも嘲罵することと勿れ』と。

「近世畫家」の第一卷の公刊せられた時、美術界は固より文學界に於ても議論紛々と沸き、此匿名の著者に向つて其說を、是非するものが多かつた。然し之を要するに、當時の文藝界の名士は、滔々として此說の正しきを認めざるはなく、詩人ロージヤースも、テニスンも、シドニー、スミスも、サー・ヘンリ、テーロルも皆之に讃同したのである。

此時、ラスキンの一家はハーン・ヒルの住家を移轉して、デンマルク、ヒルに行つた。此所は前者よりも遙に廣くて、屋敷は七エークルのひろびろした範圍を占め、此所には庭園もあり、田畑もあり、又森もあり、邸宅の内壁はターナーの畫で飾られて居た。一家は一八七一年、ラスキンの母の死ぬまで是に住んで居た。所藏の畫幅には、三十以上のターナー物、五六のハント物、一幅のチントレット物があつた。其頃

ラスキンの父は大のターナー崇拜になつて、其畫幅を集むるに汲々とした。又其兒をして「近世畫家」を完成せしめんことを切望した。然し之が爲めには尙山や森林や、雲の研究を積み、其事例を集むるの要があつたから、一八四四年五月、父の誕生節を祝した後、一家は又もや瑞西に向け第六回目の旅行を行ひ、此所で、ジョンはモンブランや其氷河などを研究し、一身に地學者と山人と美術家との三資格を備へて、精細に此二つのものを描寫した。彼は他の畫家の企及し難き程に、能く岩石の解剖學に通じ、又地質學者や山人の及ばぬほど能く畫いた。彼は之に滿足せずベルアルプやツェルマットを訪ひ、マッテルホルンやワイスホルンにも行き、其れから巴里を經てルーヴルを見物して此所に陳列せられた伊太利の古代美術品を見て始めて之まで伊太利を輕んぜし己れの迂愚を覺つた。彼は三十二の歳にミラノ、ピサ、フィレンツェ、ベネチア及び羅馬等に遊歷したにも拘らず、至つて冷淡に伊太利の美術に對して居つたのだ。然るに一八四四年夏の今日に至つて、彼は端なくもチチアノ、ヴェロネースペリニ及ベルギーの偉大なるを悟つたから、ターナーを以て唯一と獨斷した彼はターナー以前ターナーの存するを見て、美術の歷史の忽諸に附すべ

きものにあらざるを知つて玆に古人を研究するの志を發するに至つたのである。

一八四四年の秋と冬と、ラスキンは主に中世の歴史及び美術の研究に從事し、之が爲めにはピサ及びフィレンツェに行くのが萬事便利であると思ひ、一八四五年の四月に、又もや外行の途に就いた。彼が兩親と離れて旅行したのは、此時が初めである。此行、彼は僕のジョージと案内者のクーテーとの二人を伴つて行つた。ピサよりフィレンツェに行き、彼は僧庵や堂守の間に蹌踉し、サンタマリア・ノウェラに、サンタ・クロセに、サン・マルコに、アンゲリコや、ギルランダヨの作物に恍惚つとりとした。フィレンツェに於ては、彼は思考と書作とに耽つた。更らに北方モンテ・ローザの麓なるマクニャガに至り、サン・ゴタール越によつて、ファイド及びダジオ・グランデに行つた。彼云ふ「ルーアン、ジュネーブ及びピサは余に取りては、思考と教授との中心地たりしも凡て是等に色彩を附加せしはウェロナである」と、彼は之よりベネチアに轉じ、一週間ほど此市街と海水とに對する光線の作用を觀察しつゝ、街上及び水上に逍遙ふたが、終にスクオラ・デ・サン・ロッコに入つて、此所にチントレットーの繪畫を實見するに及び、其將來の運命を左右するの大影響を被るに至つた。ラスキンは己れの生涯の

方向を決せし過去の出來事を列擧して次の如く云ふ。「ロージャースの著「伊太利」を贈られたこと、アルプの初見、荆棘に纏へる常春藤の一株、イラリアの墓、カムポサントー、モン・ブラン、ルーヴル博物館内のウェロネース」と。然しサン・ロックにて彼の見たチントレットーほどに、彼に對する印象の最も重要なるものは無かつたのである。彼は是以來ベネチアの畫風を思慕し、斯くてベネチアの歴史それ自身の研究に從事するに至つた。之と同時に彼の運命に一大關係ある出來事が起つた。夫れは寫眞術の發明である。

一八四五年の冬から四六年にかけて、ラスキンは「近世畫家」の第二卷を草し、一八四六年の夏を以て之を刊行した。彼は之に就て二つの動機を有つ。一は生活上の幸福な境遇に於ける凡の性質を說き明かさんとする事で、他は當時英國の公衆の知らなかつたフィレンツェのアンジェロの畫派と、ベネチアのチントレットーの畫派との二大畫派を故國に紹介せんと思つたことである。私は次に彼の「建築の七燈」(Seven Lamps of Architecture)につき一言する。「近世畫家」の第二卷を印刷所に付するや間もなく、ラスキン及び其家族は又もアルプに向つて出發した。此行、ラスキン

は船がカレーに向つて波を切り進むの壯觀を見て樂しみ、又明日馬をモン・ブランに驅るの快を想うては得意此の上なかつた。一行はモン・センを横ぎつて、ツリノ、ウェロナ及びベネチアに行き、ラスキンは此間其父を說服して近代畫家よりしてベネチア建築の愛翫に誘導せんと努めたけれど、父は頑固で中々に動かなかつた。ラスキン等は之よりシャムニに歸つて、此所で岩石及び氷田の研究に從ひ、又もや豐富なる知識を齎らして歸國したが、彼は故國にあつては最早堂々たる一の大家で、年少とは云ひながら衆人の推重する所となり、ミトフォルド孃は彼を見て之まで己れの接せし人の中にはラスキンほどの面白き男なしと云ひ、ロックカルトは、彼をクォーターリー・リヴューの寄書家に推し、リンドセー卿も亦彼をして雜誌クリスチアン・アートに執筆せしめた。

ラスキンの著作は益々進んで「近世畫家」は已に其五卷を發行するに至つた。彼はターナーの辯護から近古繪畫の歷史的比較研究に入つたが、彼は又一八四九年を以て「建築術の七燈」を著し、建築術なるものが國民の特質を知り得る所以のもので其人の生活歷史及び宗敎を反映せるものに外ならぬと論じた。彼は此著に於て

初めて數多の挿繪を挿入したが、其論ずる所の範圍は「近世畫家」よりも廣きに亘つたからターナーや、ハントや、アンジェリコやチントレットーを知るものの少なかつた當時の世では、却つて歡迎せられたのである。其所謂七燈とは美術界の新領域を照らすものゝ謂で、凡ての美術の根源の要素であつた。

彼の所謂七燈とは眞。美。力。犧牲。服從。勞働。記憶。是の七つである。彼は是等の眞善美の諸觀念の爲めに驚くべき聰明と熱烈と雄辯とを以て其文を綴り、想を編んだ。素より其中には矛盾、詭辯、粗雜なる假說が澤山にあるけれども彼の論議の根本に横はる眞理は牢乎として動かすべくもない。此眞に次ぐものは美である。美は、自然それ自らの建築に於て求めらる。建築術は又之を建築せし人の生活、風俗、感情及び宗敎を披瀝する。吾人は建築物に於て之を造營するに要した手を回想する。之を要するに美術は、道德上、智力上、民族上及び社會上の理想を表明すべき所以の器具方便であつて、それ自らに於て一の目的たるにあらざるは健全なる建築の性質であると論ずる。此の點につきては私は他で論じて居る。

「ヴェニスの石」(Stones of Venice) ラスキンの初めてヴェニスを見たるは、彼が病氣にて大陸に遊んだ十六歳の年(一八三五年)であつた。次いで一八四一年五月、其尙オクスフォード大學にあつた間(二十二歳の時)にも、二日間ヴェニスに留まつたことがある。當時彼は失戀の冬を羅馬に過ごしたが、ベネチアの春に接するに及んで其心の病癒えたと云つて居る。彼は鐵道の開通せざりし以前のヴェニスの趣味多き風景を賞して措かない。一八四一年五月六日の日記に記して云ふ「神に謝す、余の此地にあることを。これ凡ての都市中の樂天地なり。此地とシャムニとは地上に於ける余の二目的地なり」と。

されごラスキンのヴェニス藝術の大なるを知つたのは、其一八四五年、畫家ハルデングと行を共にして、サン・ロックの學校を訪ひ、此所にてチントレットーを實見した時に始まる。彼は之よりヴェニスの歴史を究めんと決心した。彼は一八四一年にも、將た四五年にも、仔細に己れの所感を錄し、其「七燈」を公にするや、未だ「近世畫家」を完結せざるに、早くも「ヴェニスの石」なる新著をものせんと決した。此新著は、其評論の範圍を建築に限るものにあらずして七燈の敷衍である。信仰、思想、習慣の國民の

外的表現、即ち彼等の藝術や、家庭や、公私の建築物に對する、動及び反動の現象を明かにせんとするものであつた。彼曰く「一國民の歴史は書籍よりも寧ろ眞實に其石片の上に記錄せらる。凡て偉大なる建築は國民の德高きを說明するものたると同時に、凡て劣等なる建築は國民の不德と耻辱とを曝露するものなり」と。一八七七年彼の手記せしものゝ中に左の如くある。曰く、「ヴェニスの石」は、築造美術の法則を敎へ、凡て人間の工作の美は之を作れるものゝ仕合せなる生活によるものなるを示さんとするものなり」と。之ぞラスキンが藝術哲學の關鍵であつて又之を彼の社會改革論に結合せしむるの連鎖であつたのである。

彼は斯くて一八四九年十一月、其妻と共にヴェニスに赴き、大統領の官邸、サン・マルクの寺院や其他の建物を仔細に研究し、之が爲めに圖面を引き、兀々勉强することの四ケ月、一八五〇年の夏、歸つて「ヴェニスの石」の著作に取掛つたのである。彼は之に挿入すべき各種の繪畫を當代の最大なる彫刻師に依囑して之を刻ましめた此後「近世畫家」の後編を書いた時にも、是等の彫刻師の力を藉つたから、彼の御蔭にて一派の彫刻師が結成せられたるの有樣であつた。然し今日に至つては寫眞術の技

巧の行はるゝ樣になり、此種の彫刻師は惜いかな亡んだ。

ラスキンは倫敦のバーク街に移りて、事業に從事し、折々は社交界及び王宮にも出席したが、斯くてこの間に一八五一年の夏を以て彼は「ヴェニスの石」の初卷を公にするに至つた。これ恰も英京に女王及皇婚の發起で萬國博覽會の催された年である。此の書の一度公にせらるや、建築家及び批評家の中にも之に反對するものは甚だ少くはなかつたが、非常の歡迎を被り、口惡きカーライルの如きも、口を極めて之を頌めた。カーライルの批評に曰く、「これぞ思ひもかけぬ奇異なる而も最も眞にして秀絶なる「石の說敎」なり。これ建築學の最良敎科書にして吾人は大に之に就て學ぶ所なかるべからず。斯かる批評的研究の目的精神こそは、實にこれ今代の一特徵と云ふべし。余は信ず、全く新なるルネッサンスなり」と。又シャーロット・ブロンテは云つた。「ヴェニスの石は偉大である。大理石は其內臟までも發かれた。ラスキン君は余を以てすれば今代の滔々たる書籍製造家とは異りて、少數の純粹なる作家の一人であると」。

此一大成功を齎したラスキンは、一八五二年を以て又もやヴェニスに赴き永く此

に留まつた。彼が此地から詩人ロージャースに其書を寄せし時は、ヴェニスの美觀も漸く、彼の目から消え去りかけて居た。そして彼は其近世佛國式の都會たらんよりも寧ろ頽敗せる廢都として橫はるに至らんことを望んで居た。斯くて材料を集め得た彼は、一八五三年の春を以て終に「ヴェニスの石」を完成し、之を發行した。ヴェニスの石」は「七燈」の趣思を具體的に擴延し、建築物に對する公私生活の影響の史的證據を提供せんことを以て其目的とするもので、「七燈」よりは想像に乏しく、亦議論が少かつたけれども、修辭によつて破らるゝことは多くない、其目的は一層確乎たるものがあつた。これ彼が全力をヴェニスの建築物に注集したからである。彼は又それのみでなく、近代の勞働者の徒に機械の奴隷たることや、機械的工業の道德上、社會上並に審美上の缺點をも指摘した。E. T. Cookなども云ふ如く彼の說敎を通じての根本的缺點は、彼が漫然一信條を想像して、之に熱執し、其哲學も歷史も將た社會的効果をも更に研究せざりしことであつた。彼は神學に於けるが如くに歷史に於ても、亦美術上に於けるが如く經濟上に於ても、常に己れ一個の頭腦よりして、獨斷的に新しき定理を構成し出し、神學や史學や經濟學や將た美術に就

いて果して已に確たる智識の存するや否には一切無頓着である。然し彼は兎も角も稀有の天才である。それのみならず、彼は又鋭き同情を有する多感の道德家であつた。

ラスキンが「ベニスの石」の初巻を發行した一八五一年から一八六〇年までの間は依然として美術の批評家であつた。無論此の頃より彼の社會改良家としての色彩は其の文筆の上に現はれて來た。一八五一年後に彼の妻となつたエウフェミア、グレーを悅こばせん爲めに十年前に書いた「黃金の川の王」も公刊せられた。彼はかゝる間にずい分悲しい愛の經驗を踏んで行くのであつた。此の點につき私は別に述べてあるつもりだ。一八五三年には悲しい離婚の問題が惹起した。一八五一年後はラスキンは主として倫敦に住み妻と共に折々社交界にも出で、サミュエル・ヒッジャースや、マウント・テムブル卿夫妻や、トマス・カーライルや、ハウトン卿や、レデリック・モーリスや、デビー寡夫人や、ケムブリッジなるトリニティー・カレッジの長ドクトル・ヒューウェルなどを訪ひ訪はれつした。彼が當時倫敦の夜會に出席した時の狀を母に知らせた書がある。

「最愛の母上よ。昨夜悲しき會があつた。そは大なる鈍き奇怪千萬な集りでした。人々は右往左往に走り廻つて何の目的の會であるか理らない。海軍の人々若き貴婦人の私に刺を通ずるもありました。私は之と語を交したものゝ私は出來る丈け早く之を脫したのです。去つて貴婦人の何人であるかを傍人に尋ぬると、レディー某であつたのです。又カラーに顎を埋めた一人の黑い男に紹介されたのですがその黑き男は上院の議員だと云つて私が何處に住んでるかを問ひました。私は之を告ぐるの要もなかつたので之を謝して去つて又其何人であるかを他に問ふたのです。又も一の若い貴女に引き合されたのです。其婦人は私に貴下は圖書を好まるゝかときいたのです。私は又去りて貴女の何人なりやを探ぐるに、彼はレディー某でありました。斯かる會は私には全く無趣味です。夫れで私は多くのものを遠ざかつて獨り壁に倚りかゝり、時計を出して見て終に退會しました。今朝は甚だ不快です。父上の御幸福を祈ります」

一八五〇年五月には、ラスキンはバッキンハム宮に行つて女皇に謁見した。一八五一年、ラスキンは「羊舍構造論」(Construction of Sheepfolds)を作つた。これは英國に

於ける耶蘇教會分立の弊を說き、其一致聯合を策せしものである。同年彼の「ラファエル前派論」(Pre-Raphaelitism)が出た。夫れはターナーの死んだ日(十二月十九日)であつた。「ラファエル前派の運動」は、ホルマン・ハント及びダンテ・ガブリエル・ロセッチの始むる所で、ミレー及びバーン・ジョンスも之に和し、英國の繪畫史に新時期を劃したものである。ラスキンは此小册子に於いて亦自然の事相を重んじ、ターナーに於て見るが如き純なる色彩を賞揚した。

ラスキンは此間に多くの友人を失つて居る。ターナーを始めウィリアム・ハント及びサミュウェル・プラウトの如き是である。チャールス・ニュートンは研究の爲めラスキンを伴つて希臘に行かんことを希望したが、ラスキンの兩親は、汽船で斯んな長途の航海に就くは愛兒の身體に宜しからずとて之を差止めた。此行にラスキンが若し赴く事が出來たら彼の智惠嚢はアテネやコンスタンティノープルの美術で充溢せられ、多大の効果があつたらうと思ふ。

一八五三年、ラスキンはアランデル協會の爲めに、ハドアなるギョットーの壁畫に就き一書を著作した。彼の美術史上になしたる最大の功績の一は、ギョットーの眞

價を認めて之をダンテに比したるの點である。なんとなれば世界の畫人中レオナルドーとミケランジェロを外にしては、ギョットーほどに其大なる智力を顯揚し得たものがないからである。

彼が公私の生活に於て最も多事なる一八五三年に、ラスキンは新なる行程を始めた。此ハーン・ヒルの隱者たり、三大著作の作者であり、新聞雜誌の批評家であり又神學の論客たる彼が、都會に出でゝ公演せんとするに至つたのは、著しき出來事と云ふべきである。彼は文學にも科學にも官務にも、有名なる多くの人を一堂に集むるに、有名なるエディンバラのフィロソフィカル・インスティテューションで、其處女講演を試みた。彼の父母は彼が斯かる要求を諾したのを見て之を憂ひ、母は三十四歲の既婚の彼を以て未だ餘りに若年だとし、父はまた公演によつて口善惡なき記者輩の批評の的となるを厭ふたのであつた。講義は建築繪畫に關するラスキンの總括論であつて、別に新奇の說もなかつたから、一部分よりは劇しき攻擊を被つた。

一八五四年、ラスキンは兩親と共に又もや外國に出かけた。彼は此時からホルマン・ハントの「世界の光」を辯護する二書をタイムスに寄せた。一行は瑞西に赴き、

ラスキンは「近世畫家」の完成に努力し、又繪入の瑞西史をも企てた。

一八五七年、ラスキンは「圖畫眞髓」(Elements of Drawing)を著し大に歡迎せられた。これは少年有志の自然を學び、自然事實を觀察せんとするものゝ爲めにものせしもので實は圖畫法に於て參考とすべき說を說いたものではなかつた。この外此頃の作物としては、一八五六年の刊行に係る「英國の港灣」(Habours of England)がある。彼は又一八五五年から「繪畫年鑑」を公にしたが、こは獨り畫人及び批評家の間に評判がよかつたばかりでなく、又公衆の大に喜ぶ所であつた。彼は又知識ある社會と多く交り、カーライルや、ブラウニング夫妻や、コヴェントリー・パトモアは皆彼の親友となつた。彼は又博物館學校及び文學上の會合にて屢々講演を試み、其專門が美術の方面にあるにも拘らず、彼は尙進んで社會問題を口にするに至つたのである。

一八五七年彼はマンチェスターで『Political Economy of Art』と言ふ講演をした。是は一八八〇年 "A joy for Ever" として出版された。日本でも『永久の歡び』と題して文學士栗原古城氏の譯がある。

註、日本のラスキン學者としては古くから栗原古城氏が有名であるかも知れない。然し同氏のラスキンに關する學術的批評論を見た事がない。

河上肇博士の『アンツージスラストを讀む』と云ふ論文は經濟學上より最も價値あるものだと信ずる、商學研究に大熊信行氏の最も權威ある『社會思想家としてのラスキンとモリス』と言ふ長い論文がある。自分は最近是れを讀んで學ぶことの多かつた一人であらうと思ふ。尙ほ同氏の『ムネラブルベリスを讀む』と云ふ小論文が國民經濟雜誌に揭つて居た。確か大正十年末の中央公論に林癸未夫氏の『社會批評家としてのジョン、ラスキン』と言ふ論文がのつて居た。自分も夫れをよんだ一人である。最も近くは慶應大學の加田教授、奧井氏等も其の研究家であるらしい。奧井復太郎氏の三田學會雜誌にのせられた『ラスキンの奢侈論』は興味深く讀んだ。實は自分も雜誌『高原』に『ラスキンと奢侈慾望』と題した小論文をのせたからである。

確か第八高等學校教授の澤村寅二郎氏もラスキンの熱心な研究者であると聞く。

一八五八年から九年に亘りて、彼は絶えず地方を講演し歩き、またオクスフォード及びケムブリッジにて働き、大學普及事業やオクスフォードの新博物館のために助力し、マンチェスターやブラドフォードやケムブリッジにては勞働の福音を説いた。彼が美術を以て凡て健全なる個人及び社會生活の表現であるとするの信念は、其講演を加ふる毎に益々堅固となつた。一八六〇年に至つて、彼が「近世畫家」の第五卷出で此大著は此處に初めて完成したのである。

社會改良家(Social Reformer)としてのラスキンに關する書籍の中私に最も力を與して呉れたものは J. A. Hobson の John Ruskin, Social Reformer であつた。E. T. Cook の Studies in Ruskin 中の論文「The St. George's Guild」も亦彼の經濟的理想を學ぶによい記錄であつた。

フレデリックモリスや、チャールスキングスレイの協力で設立された Workingman's colledge で、ロゼッチやハントやバーンジョンスやウィリアム、モリスと共に夜おそくまで講義を續けた。ラスキンの勞働者に對する愛は彼のプレテリタに詳しく記されてある。彼の生涯殊に美術批評家としての立場は一八五〇年代頃に終つて

居ると見ていい。然しほん氣で社會改良家としての地歩をすゝめたのは一八六〇年代であつたらうと思ふ。

1862. Unto this last 1871. Sesame and Lilies 1872. Munera Pulverrs は皆此の頃の所產である。其他 1866. Ethics of Dust. Crown of Wild Olive の如きは文藝的の作物にして然も倫理、神學、經濟學、地質學、商業、戰爭等を論じたものであつた。

Time and Tide はサンダーランドの一勞働者に寄せた廿五通の手紙であつたが一八六七年に公刊された。

一八六九年、ラスキンは推されてオクスフォード大學の美術講師となつた。一八八四年まで占めし地位で、その間に學績も亦著しいものがあつた。(彼は一八七三年一月、三年の任期で再び講師を囑托され、一八七六年期滿つるに及んでも亦推されて第三回の任期に入つた。然し病氣のため終に之を辭せざるを得なかつたが一八八三年に至りて又サー・リチモンドの後を襲つて選任せられ、由つて一八八四年の末まで之にあつたのだ)。彼が五十一歳で一八七〇年二月、初めて其講義を開くや、オクスフォードの學園の講堂に群集するもの續々、會場は聽衆を入るに足らな

かつたため、俄に變更すると云ふ有樣であつた。

フレデリック、ハリソンの言ふ如く彼は敎授として誠に適當な人物であつた。第一に彼は非常に學究的であり穿鑿力に富み、第二に修飾と優雅に豐かで、第三に其の智識は一般的に廣ろく然かも專門的に深淵であつた。

ラスキンがオクスフォード奉職の初年には、彼は非常に勉强し、旅行し、病に惱まされ、又再四の失戀に苦められた。彼は斯かる生活の苦艱にも拘らず、能く其講義を持續し、また繪畫の學校を建てんとして、そのためターナーやロセッチ、ホルマン・ハント、バーン・ジョーンス、チン、トレットー等の繪を集め、なほ之に加ふるに彫刻や型を以てした。皆己れの財囊を拋ちてなす所で(彼は之れに五萬圓を投ぜしと云ふ)之によりて一個の美術館の設立を見るに至つた。彼は又學生の懇篤なる指導者で、又友人として之と親交し、之と書を讀み、一般の讀者に提供すべき標準的圖書を定めて之をビブリオテカ・バエトールスと稱した。

一八七一年彼の Fors Clavigera が發行された。是は彼の愛した英國の勞働者に向つて、社會上、道德上、宗敎上の感想を述べたものである。ブラントウッド Brantwood

に隱退した後の彼は最後の作たるプレーテリタに筆を染めた。一八八七年には彼の父から貰つた二百萬の富も殆んど公共的事業の爲めに盡き果てた。

死――ラスキンの長い生涯にも矢張り死が訪れた。その最後の十年、即ち一八八九年乃至一八九九年間、彼は全く世を遠ざかつて、セヴェルン一家の厄介の下に幽靜の日を送つたのである。極めて稀に親友の訪問があるのみで、彼は又稀に己れの作物に就て、又他の著書に就いて數語を吐くこともあつた。彼はなほ散步をしたり將棋を弄んだり人の書を讀むのを聽いたり己れの愛する本を繙いたり薔薇の高い香を嗅いではなぐさんだ。彼にはもう病苦もなかつたが次第に老衰した。だん〳〵進退も不如意になつて來てからは書齊に閉籠つたまゝ外にも出なかつた。

"Sleepe after toyle, port after stormy seas"

クック氏のラスキン傳第三十節「Closing years」の卷頭にかく記るされてある。

"His strength was now ebbing rapidly. The death of his dearly loved friend, Edward Burne-Jones, in 1898, had been a great blow." (By E. T. cook)

ラスキンは或夜、バーンジョーンスの肖像に向つて暫らくそれを見つめながら言つた。

"That's my dear brother Ned."

然るに此の友は其の翌日病没した。彼の悲嘆は言語に絶し健康は衰へ其秋から冬にかけ全く弱り切つた。

一九〇〇年の一月コニストンにインフルエンザが流つた。ラスキンもその十八日に病魔に襲れ二十日には追々心臓も弱り、其の愛したターナーの畫幅と親しい人々に圍繞されて靜かな永い眠におちた。

彼の希望で遺骸はコニストンに葬られた。

政府と彼の崇拜者はウエスト・ミンスターに葬らん事を提議した。然し彼の遺言は此の申出でを斷つた。私は一日上海の米總領事夫人ミセス・カニングハムとケンブリッヂ學生のハーツ君と三人で此の寺院に詣でた。ハーツ君はスコットモニュメントの側に建てられた銅碑を指して是れがラスキンのですよと教へて呉れた。

是の紀念碑は一九〇二年二月八日セバアン夫人によつて除幕されたものである。

愛のラスキン

愛のラスキン

この拙なき一文をあの靜かなケムブリッヂの
學窓に夭折された友、菊地泰二兄の靈にさゝぐ

高原と云ふ美術雜誌に「ラスキンの經濟的美術觀」を掲げ、今亦菊地男の靈とラスキンの愛を憶ひながら再びこの拙なき筆の歩みを續く。僅か一週間のケンブリヂ、そして旅人の如き自分にさへもあの靜かな Petty Cury の宿舍や暗らい Cavendish Lavatory の追想がまざ〳〵と浮んでならぬ。K君はなぜそんなに早く行つて仕舞つたんだろう。うら若かい奥さんや、もつと〳〵長らへて貰らいたかつた獨りのお母さんや姉さん達を殘こして、更れる者なら僕が更りたかつた。却つて學究的な彼を失ひ、僕の樣な商人の子はなぜ病氣をせぬのか。ペティークユリィの四つ角から右に入つた君の古本屋で、ラスキンの傳說や評傳を七册買つて貰らつて、而も金が足らなくつて、君に出して貰らつたのは此の僕だ。

経濟學上の科學者と宗教家とはなか〳〵一致し難い。ラスキンとマルクス、キングスレイとレイニンこの四人の名をかゝげても科學者と否科學者との間には大きな溝のある事が理かる。君は科學者であつた、私をクライストカレーヂのコワィヤーに連れて行き君の本箱の中からゴーリキーの『三人』を取り出して自分は非常に面白いと思つたからと私に惠んで呉れた事もあつた。ケンブリッヂの名高いローヤルソサエティのパンフレットに論文を發表されたK君よりも、あの眞暗らな研究室から午後の三時頃歸へつて來て『三人』を讀めとすゝめて呉れたK君が一層になつかしい。日本では色白だつた。でもケンブリッヂでは蒼白に見へ、あんまり勉強仕過ぎるのぢやないかと思へた。

『愛のラスキン』もK君に貰つた金で整つた本の中から拔書して綴る事が出來るのだ。此の七册の本とは次の如くである。

Studies in Ruskin (1890) E. T. Cook, M. A.

Life of John R. (1910) Ashmore Wingate

J. R. Social Reformer (1898) J. A. Hobson

J. R. On Music (1894) A. M. Wakefield

R. A Study in Personality (1913) A. C. Benson

R. and his circle (1910) Ada Earland

J. Ruskin (1902) F. Harrison

* * * * * * *

科學者、生物學者として有名なダーヴィンは一八二八年から一八三二年までケムブリッヂに居たので其の案内記にも色々の事跡が記るされてある。私はK君から二つ程敎へて貰つて散歩のついでに立寄つた事を記憶する。このダーヴィンがウオーヅウオスやコールリッヂを愛讀しミルトンの失樂園に感激した如く、K君もロシアの文學を盛んに愛讀し殊にゴーリキーの『三人』は面白いと言つて署名までして僕に呉れた。私はその時、尊敬と憧憬の心持ちでK君を見上げ、心の中で科學者が人間の愛を温くもつて居て呉れる程有難いものはないと思つた。

* * * * * * *

『Everything in life is connected to the Sex Love』

是れはスカンディネビアの所謂新らしい女、エレンケイ女史の有名な句だと記憶する。理かり切つた事にちがいないが全く、男には女が、女には男がなくてはならぬものだ。異性の愛、愛なくて何の此の世が樂しかろと言ふ定理は、如何に偏狹な哲人も宗教家も、老人も、道德家も、否む事が出來ない。シエークスピアの悲劇も、チエホフの喜劇も、ベートヴエンのシンフオニイも、ショパンのファンタジイも此の『SEX-LOVE』を度外視して產れは仕無かつた。此の世の寂しさも嬉れしさも皆此の愛を源として樣々の型に現はれて來る。

ラスキンの全生涯は悲劇の連續である。詩人としての彼はバイロンよりもハイネよりも淋しい詩人であつた。惠まる可き愛も、運命の痛ましき戲れに虐いなまれ、若かき日のよろこびすら涙の谷間から漏れて來る淡い光であつた。美術批評家としての赫々たる榮譽も、社會批評家としての隆々たる名聲も、コニストンの村に淋しく眠つたラスキンには何の値も無かつたであらう、後の世に生れて彼を學ばんとする若きものには英國の皇太子や其他の大官から贈つた晩年の殞德表よりも、又ウエストミンスタア寺院に建てられた名譽ある銅碑よりも、唯 Adele や

Charlotte や Rosie の愛を與へてやりたく思ふであらう。

美を說き愛を說き道を說いた彼は最後まで戀の敗殘者であつた。然し愛に破れ人間の愛を呪ふ程弱者ではなかつた。家に妻なき彼の死も尙ほ死の勝利であつたらう、何んとなれば彼は最後まで人間と自然を愛したからである。

* * * * * * *

一、初戀

ADELE CLOTHILDE IOMECQ 是れラスキンの自叙傳プレーテリタに現はれる初戀の名である。一八三六年彼が十七歲の時父の友ドメクの家族は四人の娘をつれてスペインから英國に渡來しハーンヒルのラスキンの家に泊つた。クロチルデ、アデールは其長女で年はラスキンよりも二つ若く誠に美しい明るい、あでやかな子供であつた。ラスキンの性格は彼自身も告白する如く內氣な、はにかみやの少年であつた。英國の天地が暗らい氣候に閉さるゝ事の多い樣に、彼の氣分は南國に育つたアデールの如く明快では無かつた。凡てにこの小さい二人の男女は

性格の上に可なりの大きいCanalがあつた。ラスキンの戀は此の溝にModerate Bridgeを架けんとしたものである。朝な夕な彼女に接する彼の心は誠にやるせなく詩や小說や戲曲に諷してアーデルに送つたがこの乙女は冷やかに取り合ない。彼にはさても愛の歌なぞを送くる程の勇氣もなかつたから、一つの小話Neapolitan Vanditsを書いて送つたが、是れもアデールからは素氣なく一笑に附されて仕舞つた。次に掲ぐるはブレーテリタの一少部分である。

『私は先きにナポリやバンディッド、レオニなぞの物語りを一所懸命に綴り合せて『友情を求む』Friendship Offeringと題してアデールに見せたが彼女は唯感興なく一笑に附して仕舞つた。私には書いた歌なぞ、さても見せる氣にならなかつたから彼女が巴里に歸へつてしまつた時、兩面七ページになつた長い手紙を書いて送つた。然し乍らアデールからは返事すら來ぬ、たゞ妹のEliseとCarolineから返事が來て、さもかくアデールは讀んだ事は讀んだものゝ大變あなたの佛語を笑つて居た、そしてほんとにあなたには氣の毒であると書いてあつた。無論アデールは私の書いた內容を冷笑したのだ』

戀に惱むラスキンがアデールを想ひ歌ふたSonnetsに數多ある。On Adele, by Moonlight『月光に寄せてアデールに』は一八三六年の一月から二月頃にかけて書かれたものであらう。月光にかゞやく戀人の美しい顏と心を歌つて居る誠にやさしい無邪氣な詩である。

Good Night『さらばお休み』はアデールが巴里に歸へつて仕舞つてから佛國の空を慕ふて歌つたものでセンチメンタールなものである。其等の第一節を拙譯すれば次の如くである。

『美しき光に彼女は眠らん！
　おゝ、そのまごろみこそ平和なれ。
彼女は吾がいきづかい「お休み」すら知らず、
海を距てゝ、吾も亦其心送る術なし。
たゞ吾が想ひ、彷徨ふとも、
おやみなく專すらに徒け行くとも、
想は談らず亦彼女も聞かで

絶ゆるなき想ひのみ彼女の許を遙よい行く』

The Last Smile『最後の微笑』も亦アデールがハーンヒルの家を去り佛國に行きてまもなくラスキンが心の惱みやるせなく書いた短詩である。彼女の最後の微笑もたゞラスキンに取りては果かなき追憶となる。

Remembrance も亦次いて彼が書いた最後にアデールにあてゝの詩であり、四個のスタンザから成り立つた七節のソネットである。第三節と第五節を拙譯すれば

『最愛の者よ、唯一人と我は言ふ　されど吾等は　離ることなく
永へに、永へに、汝は吾が心に住へり
眠れる時も、覺める時も、我れ何處にありとも
吾は唯汝と言ふ一つの想を抱きて。

吾は好みて　地上と　み空を眺む、そは
自然に親しみあり又吾に寂しさの宿る、
吾好みて　自然にまみゆとも

汝を憶ふ聲何處よりか吾を呼ぶ。

アデール氏の Spanish Blonde は餘程美しい早熟の娘であつたらうと思ふ。かくまでラスキンの心を奪ひ去つたのは、彼女が誘惑的な女でなくとも、兎も角く十五歳としては可なり女としての强味を異性たるラスキンに與へたにちがひない。『ラスキンと其の周圍の人々』と題する著述を物した Ada Earland の說によれば、決してアデールは惡い性の女ではなかつた。たゞラスキンはあまりに內氣に而も彼女はあまりに明るく平氣でラスキンに振舞つたからで、Baron Duquesne 夫人としてのアデールは誠にフランス式の良妻だと言つて居る。人間の運命はこゝにある、運命の神々の支配はここに働らいて居る。

兩人の父の間には行く〳〵二人を夫婦にすると言ふ下相談も無いではなかつた。然しラスキンの母は嚴格なカルビン派の信者であり宗旨上のカトリック派たるアデールとの結婚には全く反對の意を示した。アデールも其後英國の學校に入學したから凡そ二年間と言ふものはラスキンも常に交る事が出來た。アデールが十七歳、ラスキンが十九歳の時アデールの父ドメクは死んだ。まもなく美し

い、フランスの貴族 Baron Duquesne とアデールの婚約が成立した。ラスキンの母もドメク家の人々もこの婚約については全くラスキンに默つて居た。無論彼等はラスキンの戀と惱みとを知つて居たが、それは若い者にあり勝ちの事として案外冷淡に放任せられ、聽てはラスキンの思ひつめた心も解ける事と信じて居た。

ラスキンはまもなくアデールの婚約を知つた、彼は泣いた。然し彼女の爲めによろこんだ。一八三九年の九月『Farewell』と稱へた詩を作つた。長く而も上品な傑作の一つと讃美せられた詩であるが凡ては失戀に泣く涙の結晶で彼の初戀に永久の別を惜んだ詩だ。次に掲ぐるはその第一節の最後の句である。

"The grief my words were weak to tell,
And thine unable to console."

翌年三月アデールの結婚が報ぜられし時、彼は長い心勞と不眠と過勞とから遂いに肺病になつて止むなく目的もなき歐洲の旅館に漂ふ身となつた。彼が其の當時の病狀は其自叙傳に寂しく描かれてある。

『一日夜十時頃友人のゴルドン君が去つた後で私は妙な咳をした。實は少し前

から喉のあたりに變な心地がないでもなかつた。私は口の中に異樣の味を感じたからよく〳〵調べて見ると夫れは恐ろしい血の塊だつた。其は土曜日から日曜の夜の出來事で幸に私の兩親もハイストリートの家に泊つて居たから直ぐそこに驅けつけて病氣の事を話した。母は幸にこんな病氣に馴れて居たと見へ、別に驚ろきもせず直ちに手當をして呉れた。

其後私は學校を休んでロンドンに歸り二ケ月ハーンヒルの邸宅で養生をした。私の父はオックスフォードで何んとかして私が偉らい成績を上げる樣にと希望して居た矢先に斯うした不幸になつたものだから、大變に失望して沈默勝ちになり私の行く末を心配して居た。』

* * * * * * *

二、二人の CHAROTTE

初戀に惱むラスキンが朝な夕なの苦るしみから逃れ行く道は、自然の愛と美を究めんとするの心程のみであつた。絶對的に失戀の心を慰さめ得るものは再び

新らしい戀の萠ゆる瞬間と一定の時期が到來するまでは不可能の事であろう。自然の愛、夫は唯彼の心の比較的の轉換と慰藉にしか外かならない。況んや時を異にせる彼の父母が如何に金錢に惜しみなく慰さむるとも彼の受けし惱みは治ほさるべくもない。總てに謙讓なるラスキンは始めてアデールに愛を感じた時から『とても自分には彼女の愛を獲得するの容德がない』と然ゆる心の中にもあきらめの閃めきがないでは無かつた。

私が今、二人のシャーロットに就いて書かんとするのも彼の初戀の影響が、何んなにか一人の若かい天才を淋しみの中に敎養して行つたかを學ばんとするに止まる。是れ等のエピソードは吾等後に學ぶ者に取つては面白ろい事實であるけれど、ラスキンに取つては痛ましき經驗の連續である。

それは一八三八年アデールが依然としてつれなき愛を彼に表示した頃であつた。私は玆に彼のブレーテリタより抄譯する。凡ての批評家が稱讃する如く彼の自叙傳と等しく英文學史上に價値あるものだからラスキンを學んとする人は、英經濟學史を學ばんとする人がミルの自叙傳を讀む如く是非とも一讀せられた

きものである。(Praeterita, Chap. 12. Roslyn Chapel.)

『私は微かな自分の記憶から夫れは一八三八年の事と思つて居る。私の寂しかつた心に一つの靜かな喜びを與へたものであつた。然もその爲に私の肉體までも健康に、頭の中までも稍單純になつて來た。私の母は宗敎上の友を、一人もつて居たが其の名を Withers と言つてあまり成功者ではない石炭商の夫人であつた。然し彼等は誠に人の良い慈善心に富んだ人で其後夫人が病死してから夫は時々其の娘の Charlotte を連れてよく遊びに來た、或時は暫時逗留した。彼女は十六歳で、善良な感受性の强い少女であつた。私はシャーロットと時々美術論や音樂論を戰はして、可なりにひどくその說を攻擊してやつたこともある。私は或時九ページに亘る論文を書いて正直に自らの意見を述べ彼女の說に大分反對してやつたのに關らず其の論文を貰らつた事すら彼女に取つては非常のよろこびとブライドであつたと見え學校で賞書を授けられた樣に悅こんだ。かくの如く私とシャーロットの交りは僅か初めの一週間でずい分親しみ深くなつた。

もしも私の兩親が一月も長くこのまゝに打ち捨てゝ置いて呉れたならば、私共

は靜かに了解しつゝ惠まれた戀に悅こんだであらう。ほんとうに私には愛すべき妻が惠まれたものであつたろうものを。やがて妻に先き立たれたウイザ氏と其の母なき娘が別を惜んで立去る時が來た。私は彼女が歸へる時 Camberwell Gr. ccn の森まで見送つた。そして新らしく出來た道の角でお互は悲なしい寂しいサヨナラを取りかわした。

かくして私の幸福も霞の如く消えて行つたのである。私は其後彼女がニューカッスルの一商人に無理やりに嫁にやられた事を知つて泣いた。而も彼女の夫は石炭袋の如く取扱ふたと見え二年足らずで死んで仕舞つた』

ラスキンの言ふ所皆血を吐く思ひの追想錄である。初戀の不安に惱みながら、アデールを忘れ得ずしてシャロットを想ふ樣は實に氣の毒である。彼も言ふ如く、割合にシャロットにつれなく當つたのは彼の心理に Clotilde (アデール)に對するの Paying court があつたからだ。又其の母が僅かの期間に態とラスキンにウイザースの娘を引合せたのも全くアデールのみが戀され戀す可き此の世の唯だ一人の處女でなく、シャロットや其外澤山の乙女がある事を示してラスキンの一筋

に惱まんとする心を開かんが爲めであつた。

アデールを想へる時彼の心に訪れたウイザース孃は彼にとつては戀では無かつた。そしてラスキンをつれなく捨てる程の冷たい女ではなかつた。だから彼の述懷も極めて温かく彼女を想ひむしろ母を恨んでる。

アシュモア、ウインゲート氏の評傳によるもラスキンは一八三八年其の心理の中に二人の女性を想ひ非常に苦しんだが最後の Catastrophe そして一八四〇年アデールが他の男と結婚するまでは矢張り初戀の彼女を想つて居たと書いてある。ウインゲート氏の註によると此の二人の女性の外に今一人、Miss Wardell が母の手引でラスキンに紹介された。然し彼は全然此の娘を愛する事が出來なかつた。夫れはアデールやシャーロットとの交渉があつてからあまりに間近い出來事だつたからである。ラスキンの母はあまりに技巧的だつた。(プレテリタの第一章十二節 Roslyn Chapel の S.e 256-257-258-259 には詳しく記載せらる。)

『Miss wardell's dark and tender grace had no power over me, except to make me extremely afraid of being tiresome to her』

ブレテリタによると『近世畫家』の第二卷を公にして後再び大陸に遊び故國に歸つた時、彼の悲しい物語りが又起る。クォーターリイ、レビウの記者 Lockart に Charlotte と言ふ乙女があつた。彼が始めて此の乙女を見たのは一八三九年の末頃だつたらう。ラスキンの書く所によると彼女はスコットランドの美しい色の白い子で彼に取つては人の運命を動かす程の魔女で恰も Rhymers Glen の流れから出て來たばかりの處女であつた。

此のシャーロットは確かにラスキンの運命に何等かの轉換を與へた異性である。彼女はサアウォータースコットの孫女で、ロンドンの郊外 Herne Hill の自分の家で、コックバーン夫人が連れて來たのを見たるに始まり、其後 Sir Humphry 未亡人の宅で再び邂逅つた。

『シャーロットは私の言ふ事を少しも注意しなかつた』

とは彼の正直な告白で全く、彼の心持ちは彼女に通じなかつた。彼は惱んだ。クリスチアン一誌上にも投書などをやつて彼女の心を得んとつとめたが一向にきゝめが無く、あはれにも、再び悶々の極みが重なつて、依然養生した事のあるアンブ

ルサイトに病を養ふ身となつた。

シャーロットはホープスコットと結婚して仕舞つた。かくてラスキンは再び失戀の不幸を見たのである。

『私が最後に彼女にあつたのはデビー夫人の宅で晩餐を共にした時である。その時ホープスコットやグランドストーンも共に居たがデビー夫人は氣をきかして彼女と共に散歩する樣にと親切に言つて呉れた。けれどもシャーロットは私の言葉に少しも心地いゝ返事をしないのに氣附いたからついに思ひ止まつた。

グラッドストーンは私と反對に彼女の側に腰かけて居たが私はわざとネアポリタンの囚人の事につき彼と議論しながら遂に永久に此の好機會を失つて仕舞つたのだ。』

Praeterita, Chap. II. Crossmount
SEx. 198.

ラスキンは一八四七年春絶望のあまり神心沮喪に落ちた。彼が失望の極、默し

て父母の許に歸つた時兩親は非常に驚いた。父母はよく是れを慰さめて保養させた。其の後ラスキンは全く犬、猫、小さい子供、繪畫、土地と親しむのみで殆んど大人と交はる事なく彼の所謂 "I could not bear being interrupted in any-thing I was about,, の狀態にあつた。自然の美と眞とを愛好したラスキンは生來無邪氣な子供が好きだつた。彼れが此の頃住んで居た Herne Hill Demmark Hill の邸宅は今も Ruskin park として子供の遊び場となつて居る。一體にメランコリーの彼も子供と一所に遊ぶ時だけは躍つたり飛んだりまるきり子供そのまゝだつたと彼の終生の友 Acland 氏も言つて居る。氏の子供に對する愛情そのものが實に彼の教訓と事業との根源であつた。

ラスキンは温かき心の持主である。かくも失戀に失戀を重ねた彼が荒む事なく物事に耐えて行くの態度こそ私達の敬愛すべきものである。彼は決して女を惡まなかつた。戀に破れて凡ての女を呪ふ安價なペシミストには無らなかつた、彼の愛は一層に淨化し深くなつた。彼は又『Ethics of the Dust』に於いては一老講師となつて愛を說き、『Sesame and Lilies』に於いては熱心に女德を讃美した。そし

て次の如く晩年には述懷して居る。

"I never disobeyed my mother, I have honoured all women with solemn worsnip.

商人の子がラスキンの墓に詣でたり其の Relics を調べながら一人旅の淋しさと悅びを味ふのも全く人間にはなくてかなはぬ詩情からだ。私は此の詩情を私以上に科學者であるK君に見出した。デンマークヒルのラスキンパークやハーンヒルのラスキンマノルはロンドンの一日の散歩には、夏目さんの倫敦塔以上に興味深いものであるとすゝめたら、K君は來年の春になつたら行かうと言つて吳れた。其の春の來ぬ間に遠い國に行つて仕舞つたのだ。

* * * * * * * *

三、結婚

ブレーテリタの何のページにもラスキンの妻に就いての感想は見出されぬ。妻の事については一切言はなかつたとコリンウッドもハリソンも言つてるが、夫れ程ラスキンに取つては悲しい打擊を秘めて居るのだ。彼の結婚について書く

事は實に苦しい程の悲劇である。私の拙ない叙述が到底かれの心理を描寫し得べくもない。

彼の淋慘なる結婚を生んだ運命といふものが既に呪はる可きものだ。罪は無論兩親にもあつた、其の妻にもあつた。ラスキンにもあつた。けれども此の問題を解するのは矢張り一種の宿命論が適當であらう。何故ラスキンの父母に罪があるか、言ふまでもなくラスキンの神心沮喪を救はんが爲めに、強いて此の結婚を早めたからである。ラスキンの罪はこの結婚を承諾した最初にある。其處に淋しい彼の運命がある。其の父母は今日まで sex Love の問題につき割合に無關心であつた。否夫れは寧ろ冷淡と云ふ可きもので機會が來ても是れを適當に按配する事を等閑にした。ラスキンは默して苦るしみ兩親は始め彼の心の展開するを望むに極めて樂觀視した。然しこの樂觀が長く續き得るものでない。アデールを心に得ず、シャーロットを失つてからのラスキンは、暫ばし家を去つて遙まよい適〻家庭にあつても、唯默して談らず、兩親を捨てゝ大陸に旅するなど、彼の兩親を心配させるのみの行動であつた。

Euphemia Chalmars Gray 是れラスキンの妻の名である。一八四〇年ハーンヒルのラスキンの家に客人として泊つた事がある。其の時この少女は何かお伽噺をして呉れと賴んだ。ラスキンはよろこんで物語つた。そして其の時書いたのが彼の所謂 The King of Golden River で一八五一年ドィルが挿繪を描いて出版され英國の少年少女に愛讀せられたものである。(過日丸善にて保高某氏の邦譯黃金之河のあるを發見した)

ラスキンは父母にすゝめらるるまゝに一八四八年四月十日スコットランドのペルスで此の婦人と結婚した。彼女は美しい活き活きした社交的な藝術を解した善良な女である。Ada Earland の說によると

『彼は兩親の許を得た、――否、彼等の熱心な要求を容れて結婚した。彼は從順な子であつた。其の母を悅こばせん爲めに結婚した。ミス・グレイもまだ若かい經驗少ない處女であつた。The match was good one, ついに彼等は結婚した。

かくの如き心持ちでラスキンは結婚したのだ。夫人は一見、怜悧に誠に淑やかに見へた。そしてラスキンの友や知己は心より此の好配を祝賀して居る。私は

こゝに面白ろい手紙を發見した。夫れはラスキンが結婚前即ち一八四七年十月五日に其の親しい友 W. M. Macdonald にあてゝ書いた長い手紙の中にエフェミア・グレイに對する愛の感想を漏らして居る事實である。今私が『Ruskin And An Early Friendship.』By J. H. Whitehouse の論文中から拙譯すれば次の如くである。

『私はミス・グレイをほんとに愛してるんだ。だから私はくどくどしくあなたに話さうとは思はぬ。が唯だ一こと、夫れはどうも色々の點からして、ミスグレイが心より僕を愛して呉れるのでなければ、私の妻として不適當である樣に思へるのだ。彼女の周圍には澤山の男が其の注意を引く可く群がつてる。然し私はそんなに自分が劣つてるとも思へない。然かもグレイとはずい分古い友達ちだ。樣々の理由から私が今少しく立入つたなら彼女は友人以上になつて呉れると思ふ。然しもしも此のまゝ半年もお互に離れて行き、明年私達ちが共にスウィスに旅仕樣と思つてるのにも同意せず他の友と行つて仕舞ふ樣なことがあれば、私は一層に不幸な淋しい旅をせねばならぬだろう』

この手紙によるとラスキンの彼の妻に對する愛は Love で無かつたとするの說

は破れてる。彼は正しくミス・グレイを愛して居たのだ。此の手紙は Perth の Bowerswell グレイの家で書かれたもので、數日後に彼はロンドンのデンマルクヒルの居宅に歸へつて居る。

結婚後のラスキン――彼も妻も不幸であつた。新婚旅行は南方の方に旅行した。不幸にも亦彼は肺を惡るくした。サリスベリイの寺院をスケッチして居た時風邪をひいたのが源である。病氣はずい分惡るかつた。母がやつて來て看護した。新婚早々の希望に充てる樣々のプラーンはすつかり駄目になつてしまつた。まもなく病氣も小康の時が來た。旅行に行つてもさしつかへなくなつたので一家族打ち連れて佛國のノルマンディ地方に病を養ひ『建築の七燈』に益すべき寺院を訪れて研究した。この間ラスキンの母は絶えず其の子の病氣の世話をして新夫婦の間に立入つた。ブライドは可なりに氣まづい思ひをさせられた。

ノルマンディの旅は却つて彼の研究心を煽つたので病熱を惡るくした。止むなく一同はロンドンに歸へり、新夫婦は新たに Park St. に家を買つて住んだ。新夫婦の生活に就ては全く完全な記錄がない。其の當時の模樣はたゞ斷片的に手

紙や人の流言で知り得らるゝのみである。ラスキンも又七年間と云ふもの、其の結婚生活については全く口を緘して談らぬ。私は何か此の生活について知り得たいと思ひミレイの傳記を三册程渉つたけれども全く徒勞に終つた。たゞハリソンやコリングウットやアダ、アラーンドの說によると此の生活に於いて(一)ラスキンは美術と婚した傾向(二)母のよろこびの爲めの結婚(三)ミス、グレイも失望の狀であつた言ふ三個條を想像し得らるゝに止まる。彼のプレテリタを熟讀しても一八四七年の秋から一八四九年の春までは何の記述もないのに驚ろく。

一八四九年二人はヱニスに遊歷した。若かいラスキン夫人は社交界の花となつた。ラスキンもつとめて共に舞踏會に行つた。たゞ彼は夫としてエスコートしたのみで決しておごらなかつた。彼はヒタスラ Stone of Venice を書く可き材料を集めた。

バークストリートの家に歸へつたのは翌年の春で、彼は『ヱニスの石』を一所懸命に出版すべく準備をした。新妻はしばしば一人で外出した。うら若かいラスキン夫人に取つては無理ならぬ事であつたろう。けれども靜かな病身の彼に取

つては大きい不幸であつたのは事實だ。評者は云ふ、物質的に有福なラスキン夫人は美しく飾つて社交界に出て行く。彼は別に其の妻を要すとせで勉强したと。アダ、アーランドも次の如く書いてる。

『メリ・ラツセル・ミツトフォードの友情』と題する本を書いたレストレンヂ氏が私に次の如く言つた。或る時ロンドンのある集りで

何處にラスキン氏は御出でになりますかと問ふたら、ラスキン夫人は

Oh, Mr. Ruskin? He is with his mother he ought to have married his mother!

と答へた』

この言葉は可成りに捨て鉢の言ひ方である。若かいラスキン夫人はずい分義理の母に不快な心を懷いてゐる事が解かる。然し道德や倫理で此の問題は解決出來ない。愛によつて解決するのが一等だ。

運命は悲哀の翼を展けて一對の男女を抱く。そして暗らい影が何時の間にか永遠に二人をセパレートして仕舞つた、

* * * * * * *

一八五一年の春J. E. Millais の繪『大工の家のイエス』に就てロンドンタイムスが惡評を記述した。彼は一書を送つてミレイの爲めに辯じた。此の爲めにミレイは非常によろこび、ホルマン・ハントと共にラスキンに感謝狀を書いた。其の翌日ラスキンは其の妻と共にミレイの畫室を訪れた、ミレイに對するラスキン夫妻の感じは非常に良かつた。以後絶えざる交際がつゞいて彼れ等は互いに親しい友となつた。ミレイとラスキンとは互いに美術上の學識に就いては爭論した事もある。殊にターナーの天才に就ては一層相反した考へを持つて居た。然し其の爲めに別に互いの友情が傷いた理けでなく、一八五一年にはスイスに行く可くラスキンは彼を誘ふた。

一八五三年の夏ラスキン夫妻はミレーをその Glenfinlas の居に招いて、可成り長い夏の休暇を送つた。彼等はコーチでモルベスやトロサックスやメルローズやスタリングを訪れた。(私も彼等の後を眞似ねて二週間程かゝつて美しい谷、水、森丘、山を馬車で歩いた)

グレンフィンラスの生活は餘程面白ろく樂しいものだつたろうと思はれる。

然し其の結果はラスキンの妻が一層に彼より距つて仕舞つたのである。ミレイも或時はラスキンをスケッチし、又或る時は其の妻と樂しく談り、又或時はラスキンが其の夫人の趣味に對してあまり無關心だと忠告した事もある。そこへラスキンの親友 Acland も來訪した。ラスキンはこの友と唯二人で居ることが多かつた。

まもなくグレンフィンラスの生活も終つた。夫々に別れを告げてラスキン夫妻もロンドンに歸へり亦再び彼等の ill-assorted life が始まつた。其後數ケ月はこのまゝに打ち過ぎたが或朝ラスキン夫人は何の挨拶もなく、彼を捨てゝペルスの父の許に歸へつて行つた。

一八五四年五月九日、カーライル夫人はジョン・カーライル博士にあて次の如き手紙を書いて居る。

『今日此の頃、ラスキン家の事につきロンドンでは非常の評判でございます。ラスキン夫人は其兩親に伴はれてスコットランドに行つて仕舞ひラスキン氏も亦スヰイツルに行かれました。一般には此の別れが永久の如く傳へられます。ラスキン夫人が離婚を欲したからこんな事になつたと云ふ評判もあり

ますが、私には他人が如何に夫人を惡樣に言ふとも、彼女を氣の毒に思へてなりません。ラスキン夫人もまだお若かいのですから』

この手紙はラスキン夫人に對して可なりに同情して書かれたものであるが、此事件はロンドンの學者や藝術界の人々に取つて種々樣々の取沙汰が行はれた。

まもなく結婚無効の訴訟が提起された。ラスキンは默して彼女を離婚した。一八五五年二月三日彼女は直ちにミレーと結婚した。そして倫敦の交際場裡にレデーミレーとして花やかな生活を送つた。ラスキンはいよいよ寂しい沈默と研究を續けた。

"No blame appears to either side,

と言ふ評言は最も好ましいものであつたろう。彼女はラスキン夫人たるよりミレイ夫人たるに適したと見へ、晩年ミレーをして、吾が妻なかりせば今日の成功は見られず、彼女は良妻にして良秘書役なりきと歎ぜしめた。

ミレーに比してラスキンの生活は益々寂寞となつた。彼はデンマークヒルに身をとぢた。然も尙戀に破れて愛を呪はず、依然としてミレーの最も良き紹介者

であり、稱讃者であり、辯護者であつた。

* * * * * *

愛を失へるラスキンが如何に美術と人生の研究に身を慰さめたかは次の著作の多いのにも明らかに知る事が出來る。一八五四年兩親との瑞西の旅先からホルマン・ハントの『世界の光』を辯護する二書をタイムスに寄書した。一八五六年の『英國の港灣』一八五五年からの『繪畫年鑑』一八五七年の『繪畫の眞髓』同年マンチエスターで爲された『美術の經濟學』等は皆其の頃の彼が心勞の所產であつた。

* * * * * *

四、最後の戀

翻つてラスキンの私生活を見るに一八七二年には又恐ろしき彼のメンタルクライシスが到來した。そして一人の女性が彼の心裡に現はれた。(此の戀物語を告白したのは彼の七十餘歲の時である) Rosio は愛蘭土の產れで、か弱い美しい清楚な乙女で信仰深かい子供であつた、Rose La Touche がその本名である。フレン

チユグノーの血は此の少女に溢れて居た。プレーテリタによるとラスキンはウオーターフォード夫人に紹介され、ロージィ姉妹に繪畫を敎へたのが彼の三十九歳で、このロージィの九歳の時であつた。

"Crumpet" はラスキンがロージィから附けられた綽名で、終いには『聖』とまで呼ばれて居る。ラスキンは始めからこの少女を可愛ゆく思つた。繪畫がだんだん上手になるにつれ地理も敎へた。

一八五九年ロージィやその家族はフロレンスに移住した。二人は互いに文信する事を約して別れた。第一信はプレテリタの第三章三節に出て居る。Dearest st. Crumpet に始まり ever your Rose に終つてゐる。一八六一年には彼女等は故郷愛蘭土の家に歸へつた。ラスキンは遙るか海を越えてロージィを訪づれ、二人で森や林を散歩して宗敎を談じた。

『Sesame and Lilies』はロージィにデディケートされたもので、一八六四年のマンチエスター講演と一八六八年のダブリン講演等が即ち是れである。

其後彼等をエデンの鄕と呼んだサーレーのラスキン家で Paradisaical walk をつ

ゞけた。此の散歩は彼等の、殊にラスキンに取つては最も想ひ出深きものであつた。彼の愛は戀である。ロージィが女となり成長して行くに連れ彼の想ひは一層に深くなつた。一八六五年ロージィの姉は結婚した。彼女は淋しく一人家に殘つた。彼は詩を作つて慰さめたりなぐさした。

『私は彼女の姿を眞近かく見た、
　おゝ、その魂よ、その女の姿よ、
　家を守る姿はいと輕ろやかに、
　その歩みさへ聖女の如く自由に、』

ラスキンが彼女に戀を談り、その兩親に結婚を申込んだのは實に一八六六年であつた。彼女は悶えた。兩親は驚ろいた。三年間彼等の交りは絶えた。信仰深き彼女は苦しみ悶え祈つた。彼女とてもラスキンを愛した。彼女はされど、信仰の相異を理由として斷つたのは一八七二年の事である。コリングウッドの傳記は最も詳しく此の消息を傳へて居る。ラスキンは其の後彼女に面會を求めた。然し永久に其の戸は開かれずローズは死んで仕舞つた。

ローズ・ラ・トウーシュの死は彼に取つてアデールの結婚以上に、その生涯の恨事であつた。彼は次の如く書いて居る。

『木の頂より打たれて落ちた小鳥の如く、

私の悲愁の泉は永久に引き去る事がないだろう。』

彼は不眠症に陥つた。折々惡夢に襲はれた。彼は心靈によつて相感通せんと思ひ精靈論者の集に出席した事もある。彼は數年前ヱニスの學士院でカルパチオカが書いた St. Ursula 像を見て深く感激し、是れを模寫し、ウルスラの傳記に夢中になつた事がある。そして是れを戀ふて婦人のすべての德と高雅の權化とを讃美し講義などをした事があつた。思ふにロージィはこのウルスラに一致して仕舞つたのである。

其後の彼の著作にダンテのベアトリチエと共にウルスラの記事が出て來るのを觀れば、如何にローズ・ラ・トウーシュの影響が偉大であるかを想像するに足ると思ふ。

私はラスキンの書いたロージィの肖像畫を二枚持つて居る。極めて柔かい線

で畫かれ夫れは一八七四年ペンシルでラスキンが心こめてスケッチしたものである。聖畫を見る樣だ。

ラスキンの書いたロージィへの愛の手紙は見當らぬ。然し普通の手紙や詩などは其の評傳などに散見せられる。

一八六一年始めて彼がロージィを見た時の Pen-Picture を抄譯すれば次の如くである。

『ロージィは僅かに十三歳だつた。然し其の顏や姿は彫刻された樣に靜かな輪廓をもつて居た。彼女は夕日輝く森の中を白い像の如く逍ふた。』

又一八八四年、彼の晩年の友人にあてゝの手紙には次の如く書かれて居る。無論ロージィが生長して後のことである。

『ローズは丈高く美しい姿であつた。其の顏は最も美しく刻まれて居る。或は俗人に取つてはあまり嚴かであつたかも知れない。悲しい時には一層ノーブルになり不思議の美しさだ。されば始めて彼女に接する人あらば、クリストの妹かと想ふであろう』

ラスキンの經濟的美術觀

ラスキンの經濟的美術觀

一九二〇年の秋英京にて

小序

可なり長いスコットランドの旅から歸へつた自分には、ロンドンの町々が自分の故郷の如く感ぜられた。ラスキンを思ふ旅は是れからチャリングクロスや英國博物館前の古本屋通をあさる散歩となる。

自分は斯うした心持ちで此の拙文を書く。

昨年はラスキンの百年祭だつた。

Ruskin the prophet と呼ぶ簡明な批評も出版された。英國のブルジュアや勞働者の智識階級には一九一九年二月八日はずい分紀念された事と思ふ。

「ラスキンの經濟的美術觀」と稱ふ題目に就ては自分は隨分迷つた。美術的經濟

觀に仕樣と思つたからである。それで此の問題を論ずる前にはどうしても Luxury についての考察が必要だと考へ、其の一としてラスキンの奢侈に對する態度を掲げて見た。

自分は此の論文をロンドンで書いて居る。そしてその心持ちは、日本で始めてラスキンの經濟觀に就いて論文を發表せられた恩師、京都大學の河上肇教授(アントウー、ジス、ラストを讀む)と、父や私に更つてロンドンで働らいて居る物靜かな加藤氏と、自分の五ケ月間寄寓を共にした Scottish Painter Steinphen Reid 氏にデディケートするのよろこびである。

ラスキンの著書やラスキンに關する批評書類は仲々に多い。自分は古本屋で可成りに面白ろいものを發見した。大部分集つたつもりである。自分が今後二十年長生しても讀み切れない事と思ふ。

自分は或種の社會主義者から冷笑されてもかまはない。そして自分を嗤ふ人には

C. F. G. Masterman 氏の論文 Ruskin the Propher ゥ J. A, Hobson 氏の Ruskin as Politicl

Economist を御目にかける。

一　ラスキンと奢侈欲望

ラスキンに依れば財は一般に二つの種類に別かたれる。直接生活に必要なるものと、生活上の目的に須要なるものとが即ち是れである。

直接生活に必要なるものとは即ちラスキンの所謂 Useful Property であつて、營養の爲めの食物、身體を保護するの家具、衣服、薪炭、及び是れ等を生產すべき土地である。

生活の目的に關する財產と云ふものは、人々に慰安と快樂を與へ、或は人間の思想を開發するが如き物を云ふのであつて、美しき衣服、書物、繪畫及び建築物等が夫れである。

彼は更らに廣義の勞働(人生百般の勞働)即ち肉體的精神的勞働に相關連して更らに財を五種に分かち、更らに二種類によつて分かれた不備の點を補つて居る。今簡略に其の分類を指示すれば次の五種となる。

第一　特に勞働に寄つて生ぜざる人類生活上の必要財である。即ち人が此の世に生るゝや直ちに其の權利として享有し得るものであつて道德上不可分(Morally unalienble)のものである。空氣、水、土地が即ち是れである。(ラスキンは土地私有につきては特に論じて居る。)

第二　特に勞働に依つてのみ生產せらるゝ財であつて、吾人の生活上の必要品である。是れを所有するは一に、勞働の結果に依るものである。簡單なる食物、衣服、住宅、其材料、道具器械及び勞働の爲めに使用する諸動物の如きものである。

第三　無論勞働の所產であるが、吾人の生命を支ふるに何等直接の効用は無いものである。唯其の Podily Pleasures and Conveniences を與ふるに過ぎないものである。

かくの如き財、例へば美しき家具とか寶石を使用する事は全々、利己的の事であつて其の所有主一人の樂に限られて居る。

第四　無論勞働の所產であるが、主として知的或は感情的の快樂を與へるもの

であつて、テニスコートの土地、書物、藝術品、博物學の標本の如きものである。此の第(三)第(四)の區別は困難である、唯、或人には奢侈品であるべきものが、他の人に向つては知的、情的快樂となるものである。赤阪や新橋の待合の床の間の花は奢侈品である。けれども小石川植物園の花は第(四)に入るべき財である。更らに病室の患者に與へられた花は一種の醫藥ではあるまいか。

第五　所謂 Representative Property であつて、證書、貨幣等の如きものである。

*　*　*　*　*　*

以上は、私がラスキンの財に關する說明を、その藝術經濟學の補講第八節 "silk and purple" から拔書して揭げたものであるが、今彼の奢侈論を云々にするに當たり必要と思つたから特に記載したまでゞある。

人間の奢侈とか欲望とかのやかましい問題が起るのは、此の財、即私有すべき財を中心として起こる、利己的愛、個人的偏愛の衝動から生ずるものである。夫れで要するに問題は財に向つての人間の一種の本能が活動するのであるから、其の對象物の何たるかをラスキンの力により明白にしたつもりである。

吾人は第(一)類の財たる空氣につきては奢侈の對象たるべき事を少しも現在に於いては感知する事が出來ない。けれども水や土地に於いては其の對象たる事を明らかに察知する事が出來る。大都會の中央に極端に廣ろき庭園を私有するものは是れを開放せざる限り奢侈の目的となつた證跡である。眞夏の燒けた道路を苦るしげに荷車を引いて行く人馬に取つて、清涼の水は奢侈品ではないが、富豪の湯殿に汲まれて、放りぱなしにされた多量の無益に流れ行く水は奢侈である。第(二)の奢侈に依つてのみ生産さるゝ財も、又第(三)第(四)第(五)に掲げられたものも皆奢侈の對象となり、欲望の目的となり種々に變化するものである。ラスキンは第(四)の書物に於いてすら Economy of Literature を論じて居る。

今も昔も更らないのが貧富の問題である。今の世に騷がしい社會問題も要するに貧富の問題である。貧富と云ふ事實問題が存在する限り奢侈は永遠である。奢侈はキリストの生前にも生後にもあつた。此の問題が奢侈と名付けらるゝ限り佛法の淨土も、キリストの天國も、現今の世界には得られない。

不可能と思ひ、とても駄目だとあきらめるところに理想はない。理想は矢張り

理想だ。理想を理想するところに理想の價値がある。

ラスキンの思想に一貫せるものは、此の貧富問題につき決して彼が單に是れを科學的な經濟問題としなかつた事である。彼はそこに道德的、もしくは人格的な最大要素を發見して、科學と倫理道德との調和に彼の使命を觀た。彼は藝術を唱へて藝術を超越し、經濟問題を說いて、實は深く道德宗敎の眞諦に觸れて居る。從つて彼の奢侈に關する考へも單に彼の經濟眼から起つたものばかりであるとは言へない。要するに彼の倫理的人生觀が伴つて居る事を否むべきでない。

* * * * * * *

今此處に社會貧乏の原因が分配問題の上にあるか、夫れとも生産問題の上にあるかを云々するについては略することゝして、ともかく、現實社會の貧乏の原因の一つが奢侈に存する事を否むべきでない。從つて奢侈そのものが如何に生産力を減少しつゝあるかに想到する時、社會の奢侈を禁ずる事は貧乏を救ふの道である事を知るものである。私は此の考へを河上肇博士の貧乏物語によつて一層深くした。現在の社會には貧富の對立がある。從つて或種の生産力は富者階級の

奢侈欲の爲めに奪略され、貧乏人の生活用品(日用品が高價となり行く故に一般消耗品の生産が害せられたる事)は生産せられない理となる。

他人にぜいたくするなと言へばよけいに仕度くなるのが人情である。奢侈は妙に貧乏と結合して今日の如き狀態になつた。

ラスキンはその著、藝術經濟學の中に次の如く言つて居る。(Note 5th, P. 30—Invention of New Wants)

『國民でも個人でも奢侈に傾くと(贅澤をすれば)必然他の必要なるものから夫れだけの力を殺がれる理けである。故に其貧民相當の衣食の足りる丈けになるまでは、決して自分一人、奢侈をするの權利はない』

„Luxuries, whether National or personal, must be paid for by labour withdrawn from useful things; and no nation has a right to indulge in them until all its poor are comfortably housed and fed."

ラスキンによれば奢侈は明白に、生産力を阻害するの原因である。故に彼は社會より貧乏を絶滅するの方法として富める者及び生産者が、出來る丈奢侈並びに

其の生産を慎しむ事の必要を唱へた。然し此れを以つて直ちに此の種の改良策に對する全部と思つてはいけない。

彼は今日の社會主義者が唱ふる如き

(一)富の分配の不公平である限り貧乏を絶滅し能はざる事

(二)自由競爭と　私有資本とを基礎とする制度を改めて、社會主義的制度を樹てる事

等につきて論及して居る。此の問題は單に彼が社會の貧乏を絶滅するに奢侈の禁止のみにあらざる事を説明するばかりでなく、彼がたとへユートピアンの譏を受けたと雖、矢張り社會主義者の一人であつた事を證明するのである。是れにつきラスキンの土地私有問題並びに、セント、ヂョージギルドにつきては他に於いて述べる事とし此處には略して置く。

* * * * * * * *

自分で靜かに思つても果して、奢侈が絶對的に廢する事が出來るか否が一大疑問である。奢侈なるものゝ範圍も解らない。此處に甲乙兩人の同じ富を有する

ものがあつて、其の趣味を異にせる場合甲が美食をやめて高價の音樂をきいた時食道樂の乙が甲を評して次の如く言つた。

君は贅澤だね、五圓も拂らつて音樂會に行くなんて、

乙は答へて次の如く言ふ。

馬鹿を言ひ給ふな、美しい音樂をきゝに高い切符を買ふのは決して奢侈ぢやないよ。君の樣に牛肉を食ふに、ヒレぢやなくつちやいけないつて言ふ方が餘程luxuryだ。

甲の良心では、美の生活の爲めの五圓は奢侈でないと言ふ。乙の心持ちでは、食ふ爲めの奢侈は美の生活の奢侈に勝さると思ふ。

世の中の人間の多くは、眞の奢侈とは何かと問はれた時、其の答を知らないのが多いのが當然の樣である。日本ではエンゲージリングはまだ奢侈だ。けれども まさかバリでは奢侈品ではなく必要品だらうと思ふ。慣習と、風俗と人智と、富の程度とは、奢侈に樣々の色彩を加へるのである。

要するに奢侈は個人の問題である。程度問題だ。人間の良心問題だ。從つて

人格問題である。(同時に相對的の問題である。)

然し之れを國家の上から見、社會の上から論じ、人類の上から觀ずれば大問題である。

歴史は色々の事を物語る。例へば美術でも一度び奢侈の對象となる時、ラスキンの嘆ずる如く墮落するのである。美術がたゞ上流社會の專横な權勢によつて維持され、一般人民の滿足若くは慰安と云ふ事に其の働らきが及んで居ない時はたゞ此の美術によつて飾られた國の滅亡を早めるに過ぎないものとなる。ラスキンは次の如く言ふ。

大美術家の名は警報を傳ふるの鐘なり。

『ヴエラスケスの名と共にスペインは滅亡し、チチアンの名と共にヴエニス滅亡が報ぜられたり。レオナルドの名と共にミラノの滅亡は豫感せられラフアエルの名と共に羅馬の滅亡が傳はる。』

ラスキンの言ふ如く、吾人は單に美術のみならず、凡てのProperty を其の卑賤の人の到達し得るものにすべき、高尚なる特權を有する事に氣附かねばならぬ。過

去の美術に於ける如く、現代の我國の富豪の取れる態度の如く、其一部分の社會に限られ、一部分の人の驕慢を飾る具となつてはならぬ。吾人の凡ての財はラスキンの如く

"Ours (Property and other Arts) may prevail and Continue, by its universality and its lowliness"

(Modern Manufacture and Design, The Two Path)

吾々の財は、普遍的に、下流にまでも及ぼして、享樂せられなければならないのである。

私は奢侈が程度の問題である事を前にも述べた。そして凡ての財に向つて私共の欲望が中庸を得る事は誠に至難の問題ではあるが、又極めて必要な事であり、奢侈に向つての必要なる判別力は此の倫理上の正當なる理性によつてのみ得らるべきものである。

日本は別として、英國や米國の將來は、どもかく爭鬪の將來である。私の想像する英米の忙しい生活と、其の文明に功獻した、古き伊太利の過去を回想して得らる

ゝ、極端に華美な生活との間に、中庸の生活がなければならぬ。即ちラスキンの言ふ如き

"There may exist—there will exist, if we do our duty—an intermediate condition, neither oppressed by labour nor wasted in vanity—the condition of a peaceful and thoughtful temperance in aims, and acts, and arts.

勞役の爲めに疲れ果もせず、奢侈の爲めに腐れてもしまはず、正しい目的と正しい行爲と、正しい美術との共に具はつた平和にして意義ある生活が無ければならぬ。

* * * * * *

ラスキンによれば Economy は、金錢を消費する意味でなく、亦節約するの意でもない。處理の意味であつた。彼れによれば、エコノミイは人間の勞力を巧妙に按配調節する事で、勞力を合理的に適用し、勞力の結果たる產物を注意して保存する事、又其の產物を時宜に適して分配する事である。

思ふにラスキンの說き行く態度は非科學的であつたけれど、其內容に至つては極めて科學的である。彼れは人道主義經濟學者として著名であるが、其の名の割

合に科學的である。

マルクスの唯物史觀によれば、人の意識が社會生活を決定するのでなく社會生活が人の意識を決定するのである。けれどもラスキンとても矢張り同じ事を言つて居る。そして人心が如何に、社會狀態、物的條件から多く支配を受けて居るかを說いて居るのである。

然し彼れは不自然な社會狀態を呪つた。人が自然より離れ去る時不幸である事を唱へて居る。自然は人を解釋者として、その美を發揮した如く、社會も又自然の美を讃嘆する人によつて解釋せられ行く時始めて健全であると說いた。

健全なる社會の實現には健全なる人心を欲する。然し健全なる人心を得る爲めには、正當にして健全なる社會を要求せねばならぬ。

此の健全なる社會は知何にして產まるゝか、彼は富の分配がよろしきを得た社會の必要を說いて居る。ラスキンが奢侈に論及したのも實に此の點である。彼に取つては奢侈は調和を缺くものであつた。調和こそ彼れが地上に天國を作るに最も大切のものである。彼は一婦人にたとへて此の理を說く。

『彼女は右手をもつて、生活に必要な食事と着物を按配し、其の左手で、其の晴れ衣とを用意する』

彼の理想する社會は斯くの如き按配せられ、處理せられなければならぬ。彼は適當の分配を要求し、同時に人心の名譽と美の爲めに力說したのである。凡てに善良なる分配の後に、生れた晴衣と美しい衣物とはラスキンに取つて決して奢侈では無かつたのである。

彼はサンダーランドの一勞働者、ディクソンに對してすら奢侈の害を說いた。然かも同時に、富者階級知識階級に對しては至る所の講演に於いて眞の富、眞の經濟意識せられざる富者より流れ出る害毒について述べて行つた。

ラスキンは其著 Sesame and Lilies の中に人間の仕事は何であるかを論じて居る。そして彼が答として第(一)に出來る丈け質素な生活をして奢侈より遠ざかり、第(二)出來る丈けは健全な仕事をなし、第(三)に出來る丈け確實な善事を成さん爲めに自分の蓄積したものを全部費して了ふ可きであると言つて居る。是れは彼の富者に向つての講演であつて一八六八年、愛蘭ダブリンのローヤル、カレッヂ、オブ、サイ

エンスで講演したものであつた。

『自分の蓄積したものを全部費して仕まへ』と言つたラスキンは事實父の遺產百五十萬圓を費消した。

奢侈は凡ての階級に行はれて居る。貧しい車夫の間ですら行はれて行く以上絕對的に奢侈の抑壓は難事である。成金の奢侈は目立つて惡く惡くしいけれど、貧民の贅澤は恕してもいゝ樣に思はれるが人情である。然し奢侈と云ふ一點に於いては貧民のものも富者のものも別に更りはない。此の意味に於いてラスキンは勞働者の奢侈を一層に排擊した。

* * * * * *

財に對する人間の態度(消費的行爲)に三種ある。ケチンボウとクイシンボウとムダヅカヒである。奢侈は此のムダヅカヒの一變形である。

ルソーは自然に歸へれと言つた第一人者であるが、ラスキンの如く奢侈を反對した。然し彼の如く野蠻な原始世界を過大に理想した事は稍ラスキンと趣を異にする。ラスキンは現實世界を樂觀視したる點に於いて、ルソーの如く悲觀的で

は無かつた。

奢侈は本來ラスキンの言ふ如く Relati ve Conception である。ラスキンは奢侈が全く相對的概念であつて、各個人及び各階級、各國民、各時代に於いて凡て不要と目すべき浪費を指して Luxury と言つて居る。

奢侈の相對的觀念である事は獨の經濟學者ロッシエルも唱へて居る。Roscher の Grundlagen der Nationalökonomie, 22 Aufl. 1897. S. 662–663 に次の如く書いてある。

『吾人は或國民の歷史を觀るに、其の國民の奢侈 (Luxus) が其時々の有益なる限界を越えたる事を略、正確に證明し得るのである。されど、異なる二國民の中に就いて、同一の消費が一方には非難すべき浪費なれど、他方に向つては生活上有益なる享樂となつて居るのを見る。又各個人に就いて見るも、甚だ富める人が日々の食事に葡萄酒を飲む事は別に大した事ではない、然し貧しき家庭の主人の目には夫れは不道德の奢侈である。』

高等學校で學んだ墨子の所論中に音樂を非とする句があつた事を記憶するが今より考へれば夫れは墨子の奢侈反對論であつた。

然しラスキンに依れば音樂や美術は絶對的に奢侈に入るべきものでなかつた。言ふまでもなく、奢侈はラスキンに取つても、Enticing Pleasure であつた。ビクトルユーゴーは奢侈を Bastard Mirth と呼んでカブァの勇敢なる軍隊を亡ぼしたものは奢侈であると嘆じた。されどラスキンは現實の不健全な社會に於いて奢侈は避け難きものであり又時として却つて富の不平等を調節するの具であると、是に德性（Moral meaning）を附して居る。

" In the present imperfect condition of society, Luxury, though it may proceed from vice or folly, seems to be the only means of that can correct the unequal distribution of property

ラスキンが奢侈でも少しは富の分配上に益することがあると言つたのは『止むを得ざるの解釋』である。

H. Cowley の有名な言葉の中に

"Poverty wants some, Luxury many.avarice all things'

と云ふ言ふ事がある。

貧困は幾分を要求し、奢侈は多量を要求し、貪婪は全量を欲求するの意である。

貧乏のサムを欲するは當然である。貪婪のオールシングスを要求するに至つては惡く惡くしい。然し美しい着物を持つてる乙女が、更らに新流行のガウンを欲するのは『まあ許るす可き』である。

Luxury wants many を完全に否定する爲めには、どうしても社會組織の改造と、富の分配とが完全に實行さるゝ事が必要である。

今私の小さい書齋に芳賀博士から貰らつた臘石細工の "Temple Bar in Dr. Johns ons' time" がかゝげられてある。是れも一種の奢侈品ではあるが、歴史に興味を持つた自分に取つて、此の上なく、よい慰物である。此のドクトル、ジョンソンの言葉に

『貧乏の特權は、羨望されざるの幸福、醫藥なきの健康、守衛なきの安全である』

"It is great priviledge of poverty to be happy unenvied, to be healthy without phisics, secure without a guard."

がある。三年前の自分は是れを讀んだ時、味い格言とまで思つたが、此の頃此の言葉を思ふ度に不快である。もしも此の言葉の裏を考へるなれば、如何に世の中の

貧乏人が自然的に富者から馬鹿にされて居るかゞ解る。

『私の家なんか戸締も要りませぬよ、第一もつて行かれるものがありませんもの』と言つて笑つてる小さい裏長屋のお神さんに果して羨望するの心がないであろうか。薄つぺらのせんべいぶとんに比べて羽根ぶとんは奢侈である。此の羽根ぶとんを生産する爲めに、薄つぺらのふとんが生産されざる場合が多い。百姓をして働らくよりも白金細工の職工になる方が金がたまると言つて私の故郷から私の工場へ、はるばる上京する少年青年がある。

奢　是認の世の中は現在である。倫理學者や教育家は消極的にぜいたくするなと言ふけれども眞珠を生産し販賣するの爲めに、五百人も使用する事から勳章を貰らふ私の父の功勞?が存在する限り、社會病源たるビンボーバクテリアは除去さる事が出來ぬ。

ラスキンも次の如く言つて居る。

『パウル、ヴエロネーズ(Paul Veroncso)の樣な大畫家をして天井の畫を描かせようと又ベンヴエスト・チエルリニ(Benvenuts cellini)の如き大鑄金家に、盃を鑄させようと、それはあなたの隨意である。然し、一百人の潛水夫を使役して自分の衣服につける爲め海底に眞珠を探させるやうな事をしてはならぬ。』(時と潮　第廿一章より)

二　ラスキンと經濟眼

私共の父は、個人主義經濟學時代の一住民である。若かい者の使命は社會主義經濟學の世にまざまざと眼を視披らくがよい。私共は曇りなき心眼で事物を洞察してまつしぐらに理想に突進せねば駄目だ。戰爭で痛ましい勇氣をふるい他人の生命を傷けるばかりが人間に忠義の道ではなかつた。

世界的に動ごきに動ごく人心はどこで落ちつくのか……そこに理想が見ゆる……理想は理想として價値がある。今、日本の社會にマルクス派の經濟學が異樣の力で民衆を敎化しつゝあるの時に私は落ちつくの道としてラスキンを選らんだ。

社會主義者のある者はラスキンでは物足らぬと言ふ。實際不徹底だからとも

思へる。然し物事に順序と呼ぶ理想がある。人道主義の經濟學が理想する社會も確かに人類の幸福をもたらす一形式の社會だ。レーニンも偉らい。だがラスキンも偉らい。J. A. Hobson が一九一九年ラスキンの百年祭を紀念してはるばる旅行先きから送致した論文の中に、單に彼れが人道主義者たるばかりでなくむしろ社會主義者であると稱へて居る。

Ruskin was not only a humanist in the realm of industry; he was a Socialist.

又かの G. F. G. Mastorman もサン、ジョージ、ギルドに現れたラスキンの熱心なる社會改良論を讃美して、レーニンの思想は寧ろマルクスよりラスキンに近かくはあるまいかと結論する。

If this great experiment emenges from its present difficulties and succeeds, you will find that Lenin and his ideal community owe less to Karl Marx than to John Ruskin.

自分は過言と過讃をしたくない。ラスキンを批評する心持ちだ。私は楠正成を偉らいと思へば又ナポレオンも偉らいと思ふ。カーライルを偉らいと思へば堺枯川氏も感心な人だと思ふ。夏目さんの『それから』に泣けば、河上先生の貧乏物語

にも感激した。そしてたとひ批評する心持ちでもラスキン戀物語には、どうしたつてほろりとなる。

私はこんな心持ちでラスキンを研めて行く。理論よりも其の人間に感化されたいとも思ふ。商人の子は商人でよい筈だ。ソロバンを殊勝らしくはぢいてゐれば毎月の歌舞伎座やロンドンのコメディー位は別にラスキンが無くつてもかまやしない。

* * * * * * *

過信なれば過信でよい。私はラスキンを所謂經濟學者と思ふ。つまりアダムスミスやミル父子やマルサスやマルクスと同席にする。

自然の美の貴い事人間の美の貴い事、勞働の貴い事、勤勉の貴い事、謙遜の貴い事人間の愛自然の貴い事、私はラスキンから殆んど數へつくす事の出來ない教へを賜つた。

ラスキンは經濟學者なりや？彼に純理論の一貫した經濟學の著述はない。彼が經濟學の各論に亘つて論及した著作は無い。夫れ故に彼を經濟學者とするよ

りも、一種の經濟上の Reformer（改革者にあらず改良家）とする方が正當だと論ずる人もある。然し私は　彼を一經濟學者として取り扱ひたい。殊に一八六二年の "Unto this last" 一八七二年の "Munera Pulveris" に論ぜられたる諸問題の如きは、其の體容に於いて從來の經濟學者の詳述した諸議論と、大いに趣きを異にしてゐる。が、其の內容に至つては、後世、現世の經濟學者をして首肯せしむ可き純理論に富むのである。私は淺學ながらに、おこがましくもラスキンの價値は美術批評家たるにあらで社會改良論者、否經濟學者としてにあると信ず。

高等學校で學んだ中世紀の史實は詩の如く劇の如く誠に興味深かきものだつたが今斯うして經濟眼をおほろけにも見披らいて見ればその一千年の狀態は一種束縛の時代であつた。

かの Wells 氏の Outline of History に興味をもつて歷史を學ばんとする我等學生に取つては、中世の歷史がその美術史と共にあまりに英雄史である事を感ずる。其の當時の民衆生活が如何に窮窟な型の中に押込められて、人心そのものすら宗教のドグマに拘束せられて居た事を感ずる時、現在の日本の思想界すら五十步百步

ぢやあるまいかとも思ふ。

小資本家の子に生れた自分ですら現在我國の經濟狀態はずい分分配問題を等閑視した、個人主義的狀態の好典型だと切實に觀ぜられる。

美しいダンスが帝國ホテルてやられる（實は私も至つてダンスの好きな人間だ）分配問題もずい分と行々しく口にせられ、美しかるべき慈善や救濟が朝な夕なの新聞にもうかゞはれる。だが矢張り個人主義の經濟狀態その儘だ。決して人道主義の經濟狀態でもない。今日の時代に生れて、何等かの缺陷を發見した私が世の大勢にまき込まれて、經濟組織の改造に着目する社會主義經濟學と人心の改善に着眼する人道主義經濟學との兩思潮に醒めて行つたのも無理ならぬ事ではあるまいか。かくてラスキンを論ずる事は決して無益でないと信ずる。マルクスの流行する今日ラスキンを論ずる事、否彼れを讃美する事は誠に時代後れの樣である。けれども決して世の中はそんな淡いものではない。マルクスを論ずる前に必らずラスキンの思想を抱く事は無益でないのみならず、マルクスを批判するの最も必要なる基礎となるべきである。私は、

日本人として、否此の物質文明に立ち後れて進んだ日本の小さき島人として現在の日本に數多い小マルクスよりも、偉大なラスキンに近かい人間で良いからたゞ一人でも欲しいのである。東京市の公の葬式場を建てる爲めに百萬圓の寄附をする富豪は日本に數多い。されど現在の日本は一ラスキンの出現ですら問題は解決するこ思ふ。汝はラスキンを過信して、その誤謬を知らずこ論難するものがあつても、私のラスキンを想ふ心は決して止むものでない。岩村透氏の著、美術こ社會」の數行を借れば現在の日本に三種の社會改良家がある。此の三種の改良家は共に、社會改良家こしての立場は根本に於いて互いに異ふものではない。けれども其の奉ずる主義主張は互いに同じでない爲めに、盛んに議論もし爭鬪もやる。

第一種は人道的改良家である。第二種は理智的即科學的改良家である。第三種は即ち趣味的改良家である。

註、此の三種の社會改良家の區別法は詩人美術家にして、社會主義者の William Mollis の傳記を書いたコムブトン、リツケットの說によりたる者である。モリスは即ち此の第三種に入るべき者で、ラスキンの崇拜者の一人であつた。

彼は一八三四年、三月二十四日に生れてラスキンの近世畫家第一卷の出來た年小學校に入つた。ラスキン著 Unto this last は此の詩人に大なる刺戟を與へたものである。彼は一八九四年十月三日ロンドンで死んだ。彼の生涯は實に面白ろい研究に價するものである。今彼の言葉を掲げて此の註を終る。

○『社會主義者の國家に於いては總ての勞働は煩雜ではない。產業の勞働には常に快樂が伴はなければならぬ、凡て人間の產出する作品の美は、作者が幸福なる生活の餘果である。作者のよろこばしき勞働が美を齎らすのである』

第一の所謂人道的改良家は情緒的立場から社會問題に接するの人が多い。彼等は多くの場合涙の人である。彼等は他人の苦痛、難澁を傍觀する事が出來ず、假令、是等の苦患を根絕し得ぬまでも、其の幾分なりこも輕減せんこ苦慮する性質の人である。此型の改良家はもしも宗教的色彩を帶び行く時は例へばフレデリック、モリスやキングスレイの如く基督教的社會主義者になるし、宗教的傾向を缺く時は虛無主義に偏傾する。

第二の理智的改良家と名付くべき人には此の人道的慈善的衝動が主なる原因でなく彼等は科學的に社會の缺陷を摘示する。そして現時の社會狀態の間に存在する力の浪費が第一の懸念である。彼等の金言は正義公平であつて此の力の濫費を矯正せんとするのが目的である。明治四十四年シドニーウエッブが出來た。彼は此の種の英國に於ける錚々たる人物である。又マルクスやベーベルも是れに入るべきである。

第三の趣味的改良家は人生の醜穢の驅除を以つて其の目的とする。彼等の族幟は美である。ウィリヤムモリスの如きは是れに入る可き者である。要するに第一種の改良家は倫理道德によつて、第二種は科學と經濟によつて、第三種は文藝美術によつて其の目的を達せんとするものである。勿論此の三者を共有する所の改良家も少なくない。又嚴然と一人の社會改良家又は社會主義者をとらへてその屬すべき部類を見分くる事は至難である。けれども大體に於いては其の何れかに入るべきを決定し得るものと信ずる。例へば、マルクスの如きは、第一に入るべきものとすればあまりに彼の學說が科學的である。況んや第三種に入るべ

きものとは信じられぬ。

今ラスキンを論ずるに當りても此の三つの方面から觀察する時、ラスキンの社會改良家としての色彩が稍明白となる。そして、私は初め藝術評論家としてのラスキンを多少なりとも研めた爲めに、彼をウィリヤムモリスと等しく第三の趣味的改良家中に入れ樣と思つたが、又想ひ直して第一種の人道的改良家に列せしめた。

英國第十九世紀後半思想界に於ける代表者に三人ある。倫理的に self-examination, Self-restraint を警告したジエー・エス・ミルと、享樂生活を激烈に否認した、トーマス・カーライルと、美に醉へる溫き心の自然の友たり、將た人類の友たりし、ジョンラスキンの三人であつた。彼等はヴィクトリア王朝時代の社會批評家としての三大文星で、代表的人物、精神界の勇士として、必讀すべき幾多の新たなる神言を彼等の國民に供給した。

殊にラスキンの師カーライルは、其の實質的事業たる功利主義攻擊をもつて立ち、國家の富必らずしも各國民の繁榮にあらずと最も直截に『過去及び現在』に叫ん

だのである。カーライルから『眞正の天才にて其の思想は天來の閃光の如く彼の心に生じて來た』と評されたラスキンは、其師カーライルに勝る事あるも劣らざるの人道主義者であつた。

ラスキンの思想は雄大である。彼は藝術を說いて藝術を脫線した。經濟問題を說いて、其實深く宗敎道德に論及した。彼が人道主義經濟學者としての根本義は此の點に介在する。ラスキンは經濟學を以つて利欲の學、金錢の學とするの迷想(個人主義經濟學より生じたる謬想)を打破した。

○ ラスキンの美術觀も實に此の思想を基調とする人道的愛の淨化したものだ。美術も又財の一部であり、自然が人間の手に委ねた偉大な力の表現だと說くラスキンは、凡ての美術に含まるゝ Moral Spirit を高調する。

『金ばかり貯めるのが經濟學じやない、浪費するのは無論の事である。經濟とは一家の administration の義だ stewardship の意だ』かく言ふラスキンは、人間の勞働の wise management の中に經濟を見出した。即ち

一、勞働を最も合理的に利用する事

二、勞働の結果たる生產物を大切に保存する事

三、その生產物を Reasonably に分配する事

の三條件を必須事項として經濟を說明した。ラスキンが美術藝術をもつて人性を淨化する一大必要財としたのも全く

Economy = goods + good Management

の思想からだ。

善良なる處理とは如何なる義か。無論「人の問題」である、心の問題、魂の問題、精神の問題である。

善良なる社會の存在に必要なる要素は、善良なる人心である。美しき家に住む人の心が淨化されざる間は其の美しい家の價値は失はれる。美しき洋館に高價なる美術品と、得がたき圖書との蓄積は美である。けれども、もしも此のビルディングの中に、如何に多量の石炭を埋むるとも其の價値はゼロである。

ラスキンの着眼は此の點にあつた。彼の社會改良家としての立場は此の一點に集中した。ラスキンが社會經濟上の最も健全なる制度を建設するにつき最も大切なる條件としたのは此の人心改造である。彼は決して、人心に至大の影響を

及ぼす現實の社會制度其の物の實體組織を無視したのではなかつた。善惡共に容赦なく破壞せんとする。資本家對働働者の軋轢、階級戰爭なるものに彼は至大の注意を拂らつたのである。彼は先づ上流社會の人々に

『有ゆる精力を竭して財產を蓄積せんとするの誘惑より脫せよ、同時に進步したる人生の義務に關する高い理想に進め』

と言つて、上流社會の財產や收入を或る一定の程度にまで制限して其の餘を彼等の心的改良に使用す可く說いて居る。同時に勞働者等に向つては

『Moderate な私財が出來たなら、奢侈はともかく、人生のあらゆる他の慰安を味ひ自分の修養や其他の有用なる人生の目的に向つて相等の餘裕ある一階級の出現は誠に望ましい事である』

と說いて行く。

* * * * * *

私は早くラスキンの經濟的美術觀に到達したく思ふ。だがまだまだ橫道に走らねばならぬ。彼れの鋭利な經濟眼はその源を精細なる美術觀に發する。だか

ら順序としても始めに美術觀を論じ然る後に經濟論に入る可きを、自分は能ずと尾を頭に、結論を本論の一部に置いた。それは美術論をする前に奢侈論から始めたと一般である。

經濟論叢第四卷第四號及び第六卷第四號に『アンツー・ジス・ラストを讀む』と云ふ河上博士の論文があり、又石田文學士の『此の最後の者にも』と言ふ譯本がある。

靜かに是れを讀んで見ると如何にラスキンが其の當時の正統經濟學に論難を加へて居るかゞ理かる。

正しき生產と正しい消費と正しい分配とか論及されたラスキンの經濟學は、スミスやマルサスやリカルドを距る事甚だしいものだ。

『此の最後の者にも』に現はれたラスキンの富に關する學說は是れを要するに人間の道德的向上に貢獻する所のものが即ち富であつて、それのみが富である。故にラスキンの說からすると、何うしても一國の富を增加する爲めには、有要なる人物を作り出す事が肝要である。だから國の貧富は、只その國內に存在する物資の數量に依つてのみ秤量さるべきものでない。

最も富める國とは高尚にして幸福なる人間を最大多數に養ふ所の國である。最も富める人とは自ら人生の本務を極度まで實行し更らに其の德其の財を以つて最も廣ろく恩澤を衆に及ぼすの人である。ラスキンのセンドジョージ商社は此の目的の爲めに作られた一小國家である。

社會問題は今日までも、又今後共に永い困難なる解決問題である。社會主義經濟學と人道主義經濟學とは、既に過去の遺物に等しき個人主義利己主義に對しては相一致して戰ふだらう。けれども此の兩者の間には絶えざる爭鬪がある。

然し此の兩主義の終局の目的は合致して居る。夫れは只社會問題を解決する爲めに努力するの兩主義の過程に差があるのみで、私共は充分の敬意を拂つて觀察せねばならない。

人道主義と云ふ文字から忘れてならないのはトルストイである。私はラスキン以上に彼れを此の人道主義に結びつけて居た。

然し、愛と善の點に於いて、希望と感激との點に於いて、Life and Humanity との點においてラスキンとトルストイは全く一致して相讓らざるものである。

トルストイの『吾等何を爲す可きか』は彼の人道主義を見るに最も便利である。彼は此の一卷の書の中に、貧富問題を論じ、社會問題經濟問題を論じて、彼の人道主義的見解を證明して居る。此の書は彼の生涯の轉機を談るもので、丁度ラスキンの『この後のものにも』に類似する。

彼は苦悶に苦悶を重ねた結果、一道の進路を見つけた。夫れは農民を愛する事（ラスキンは一般的勞働者）額に汗して其の生活を送つて居る貧しい質朴な者の間に人生の眞理を見出そうとした結果であつた。彼の目的は民衆の救濟である。社會制度の改善である。神の名に據つて、理知の名によつて、愛の名に據つて、一切の自己を捨てゝかゝらねばならぬ大慈悲の願望であつた。此の意味で彼は自己の生活の改善である。單なる社會制度の改善や貧富問題でなく、何よりも先づ、人間、夫れ自身の生活の改善である。私はラスキンがセントジョージ・ギルドを創つて一小理想國を建設したのも全く是れと同じ心持ちであつたらうと思ふ。——トルストイは自分で自分を（幸福なる貴族としての自己を責めた。そして貧民と富者とを疎隔する最大の原因は富者の掠奪であつて貧民が富者に近かより得な